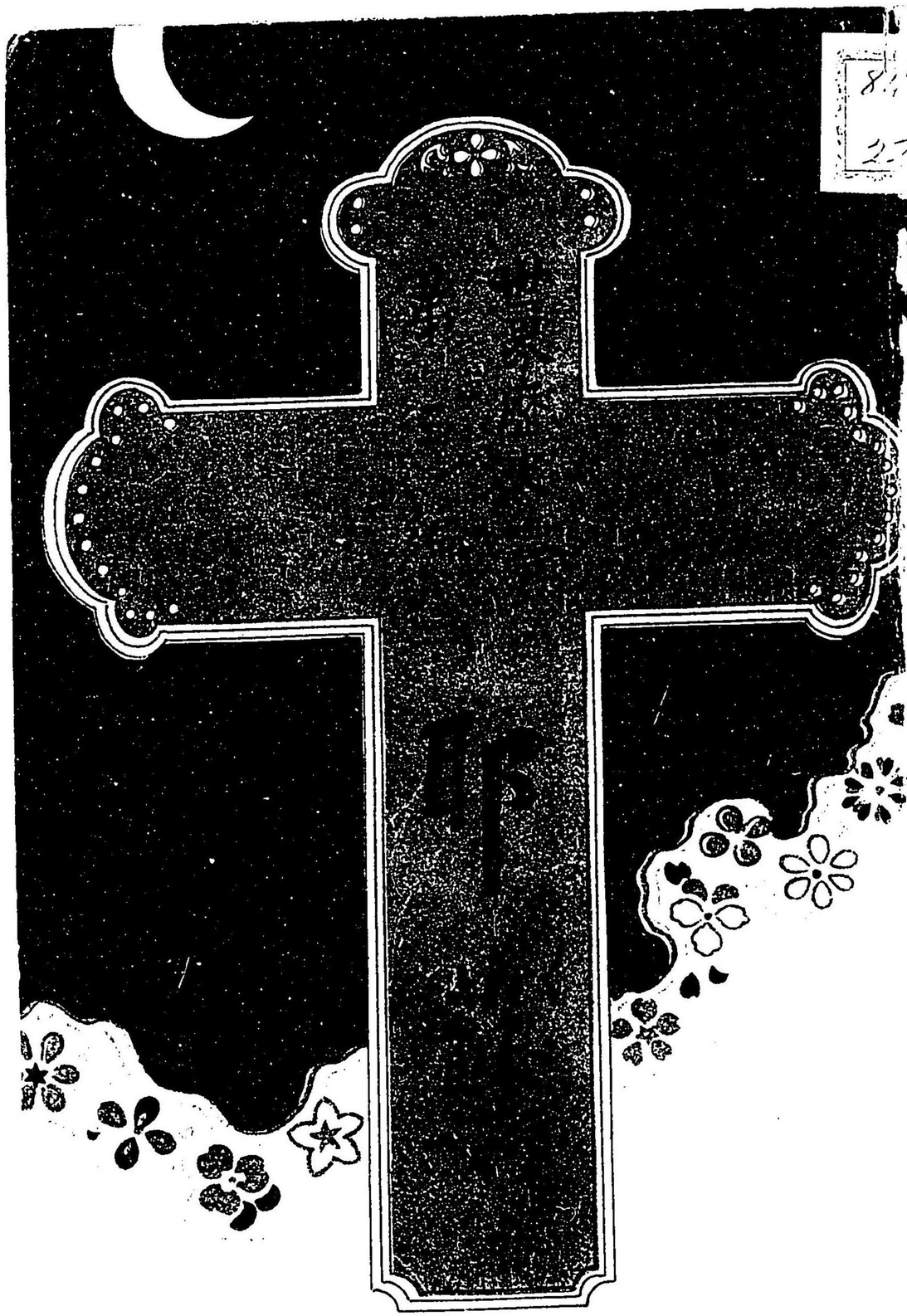


小序

著者は、家庭に於て、教育に於て、また其生平に於て、基督教徒にあらず。この故に、教義に暗らく、性情に通ぜざる筆路、終に斯教の精神を逸せむを恐る。西歐の評家、ときに懷疑の態度を以て、教祖を論ずる者あれど、これらは概ね其生の曙に於て、斯教の感化を喜びたる者なれば、著者が未だ甚督教と何の干繋なくして、漫に同外の觀察を試むるに比して、宵壤の差無くむばあらず。いたく萬邦の宗教に異なるナザレ人の教が當年の羅馬人を驚かし如く、著者の斯教に對する態度は、驚歎のそれなり。されど吾等はピラトと共に眞理とは何ぞと雲烟過眼視する能はず。著者は、かくて其智識の零碎なると、年少未だ宗教の幽玄を語る

に足らざるこを思ひて、批判を試みず、眞僞を斷ぜず、唯に教祖に關する傳說を抄記せしのみ。而して記事の序は、大英通典フアラア氏の稿に據り、傍ら著者が生平學び覺えたるを加へぬ。筆に含蓄なく、文に色彩なきは、素より自ら知る所なれど、事苟くも一宗が教祖の上なれば、記述の際おのづから確たる史的根據に徵して筆を執れり。全篇引照の文を虧きたるは、たゞ其煩を厭ひたるが故なり。

明治三十二年三月　　東京　上田敏

耶蘇目次

一　緒論……一
二　降生及び少壯……一八
三　傳教及び迫害……三九
四　受難及び復活……九三

世界歷史譚第參編

耶蘇

文學士 上田敏著
中村不折畫

緒論

基督は號なり。イエスは名なり。基督と其使徒等との成したる大業を基督教といふ。

カイザリヤ、ピリピの村徑に、彼は弟子たちを顧て問ひ給ひぬ。人々吾を誰なりと謂ふや。彼等答へて曰く、或人は洗者ヨハネ、或人はエリヤ、或人は預言者の一人の如しと謂へりと。若しこの說にして眞ならば幾代の基督教徒が無限の尊崇を傾けて、神人の調和者と賴めるナザレのイエスは、釋迦、馬哈都、摩西、孔子等と位を

等うし、心は凡衆の外に超脱して、才德秀拔の極に達せし者なりと雖も終に一介の聖人たるに過ぎざるなり。然れども イエスの弟子ペトロは、人文史上極めて深宏に且つ責任重き論斷を下して、イエス重ねて汝等は吾を誰と謂ふやと問ひ給ふ時、汝は基督なり。現ける神の子なりと答へぬ。吾等は神學のこちたきを避け、辨證のわづらひを却け、歴史に殘りたるイエスの言行を錄して、此答の眞僞を知らむとする者に資せむとす。

基督といふ希臘の語葉は、希伯來の語葉メシヤの譯字にして、膏灌かれたる者といふ義なり。されば これ敎徒が奉りたる尊稱にして、父母が呼びなせる現世の名にあらず。抑も猶太人が救世主の降生を熱望して已まざりしは既に永き世紀の前よりにして、百合の花の調にあはせて伶長の歌ふ愛歌(詩篇四五)にも、又人は

みな草なり、其榮華はすべて野の花の如し。草は枯れ、花は萎むといひけむ イザヤの預言(以塞亞四〇)にも此救世主を受膏者と呼びて、特に神の恩寵に浴し、聖靈の氣を享けたる者となしぬ。受膏灌油の式は、昔より王者、祭官を聖にする所以にして、預言者も亦これに因て特殊の天職を授かるなり。救世主は三箇の尊威を有す、彼は天啓を傳ふるに於て預言者、裁き且つ統るに於て王者、又自己を犧牲に具ふるに於て祭官なり。されば使徒等イエスを崇めて、基督と名けぬ。

イエスの名は、さはいへど、當時猶太人の間にありふれたる稱にして、ヨシュアと類音同義なり。此名舊約の諸書に散見すれど、其優れて高名なるは、以色列(イスラエル)の民をヨルダンの野に導き、ヨベルの角聲數呼にして、エリコの城を陷したるヌンの子ヨシヤ、及び巴比

倫幽囚の歸程に、民衆を率ゐたるヨザダクの子エシユアの二人なり。かくて世を經るに從ひ、此名庶民の間に傳播しイエスの故里ナザレ附近の村落には頗る多かりきといふ、されど此名の義を釋きて神の拯といふによりて、後代の敎徒は玆にも古の預言が應ひたるを見るなり。

昔カイザリヤの方伯ペストスは、使徒パウロを、アグリッパ王に送て曰く、玆に一人の囚者あり。前の方伯ペリクスの遺し〻所なり。吾羅馬人の例に遵ひ彼を執へし猶太の長老と彼とを對審せしめたるに、惟彼等は鬼神を敬ふ己が道と、パウロが生けりといふ既に死にし一人のイエスとに就て爭をなし、此訴訟に及べるのみと。イエスの復活は實に基督敎の精髓にして、其道德も、其敎義も要するに此歷史に起りたる奇蹟より生ずる必然の結果に過

ぎず。かのパウロを聽かむとするもの、獨りアグリッパ王に止らむや。

明日パウロ法庭に起て、いかなれば其基督の徒なるを辨ず。彼も亡熱烈なる猶太の學者なり。剛邁の性よく事理を辨じて、毫も情痴の癖なし。始め基督の徒を迫害して、敎堂を壞ち、信者を縛せしとあまたゝびなりしが、ダマスコの途上忽ち聖光を見、天籟を聞きて、イエスが復活を目擊してより、荆ある鞭は蹴り難く、急に信を得て敬虔の使徒に變ぜしなり。千載の今日彼の表白を讀むに、率直の語氣確信の辭令一たびは彼を信ぜざらむとし、再びは吾等を疑はしむ。されば昔ペストスは同じ辭を耳にして怪奇の念に堪へず、パウロよ、汝は心狂へり。博學汝を狂にせりと呼はりぬ。パウロ此時答て曰く、いと尊きペストスよ、我は狂せしにあらず、

いふ所悉く實にして、慥なる心より出づ。これらの事洽ねく衆人の知る所、方隅に行はれたるに非らずと。

然り。イエスの一生と事業とは僻遠の邊陬に於てせられしにあらで、羅馬帝政統轄の下に、文明世界の大道に於て、歴史の白日に現はれたるなり。されば吾等通常の史眼を放て、基督が傳紀を檢するも何の妨かあらむ。而して其史的根據とすべきもの三あり。曰く異邦人の文獻、曰く猶太人の典籍、曰く教徒の記錄これ也。「使徒、福音者等の言ふ所に從へば、基督教は草創より、極めて當代に輕蔑せられ、侮辱せられ、特に文字ある徒よりは、冷刻の輕視を被りしが如し。之を異邦人の文獻に徵するに、教徒の無識を卑み、教義の淺薄を嗤ふの類、諸書に散見せずとなさず。羅馬の史家タナッスや、スエトニウスや、又文士プリニウス、ルキアノスの如き、

或は基督教と猶太教とを混同して、政治的爭亂の朋黨となし、或は復活の奇蹟を嘲りて、痴人の夢想と斷じ、要するに無學の徒が心を寄せたる迷信の一種と定めぬ。されど其教徒が持行堅固にして、道德の潔正を破らざりしは輕佻なる當時の人をも動かしたる如く、一人として彼等が信仰の虚僞を說き、熱望の深淺を疑ひたるものなし。かくて文明國の史家より此信仰に就て吾等の學び得る所は、福音者所傳の事蹟と違ふ所殆ど無く、基督が奇蹟を行ひ、譬喩を以て法を說きしを始とし、ポンテオ、ピラトの治下に釘殺せられ、教徒が彼を神の子と信じ、其復活を聲言せしこと、又歴世の教徒が非凡の熱意、恒操、博愛、清行を以て莫大なる智力的物質的障礙ありしにも拘はらず、其道を證し、其信を傳へし事實は、毫も斯教を辯護するの成心なく却て之を破壞するの要あ

りし異邦人の齊しく證する所なり。

飜て猶太人の典籍を見るに、福音書の傳ふる所ど毫も背馳する無く、唯記錄の零碎にして、殆ど沈默に近きを憾とするのみ。知行の二を悛別して、實踐よりも悟道を重ぜしかの碩儒フイロは、イエス傳敎の當時既に六十二載の齡に達し、少くともイエス世を去て後十數年にして歿せしが、不幸にして彼ガリラヤに遊ばず、清新の傳敎終に其耳に達せざりしは千古の恨といふべし。さればフイロの著書は、イエスの事蹟を知る便あらざれど、當時猶太の民心が、國運の趨勢律法の尊奉に關して、如何なる思潮を有せしかを示して餘あるのみ。ヨセフスの著に至ては然らず。彼はおもてに愼重の態度を執り、爲にする所ありて、イエスの事蹟を沈默の間に雲烟過眼視せんとするも、曲筆の跡歴々掩ふ可からず。

例へば洗者ヨハネ、ヨルダンの河流に大衆を激せし運動に關するヨセフスの記事は、其眞筆なるを疑ふ可からざるものなれど彼は玆に文を抂げて、イエスの事蹟に一言をも下さず。云ふを欲せざる爲か、將亦已に不利なるが爲か。終にイエスと洗者ヨハネとの關係に就て隻辭をだに費さざるなり。成心ある史家が權門の爲又自家の爲に、事實の隱蔽を計りし例世に少からず、敎を棄て俗に還り、王侯に客として寄りたるヨセフスが、基督敎に就て默せしは敢て怪むべきにあらざるなり。たゞ其猶太故事第十八卷、第三章、第三節、イエスの事を記せるもの數行、基督敎の史家が頭惱しむるものあり。或は之を後人の竄入と斷じ、或は之を著者の眞筆と定め、批判紛々として辨じ難き高名の一節下の如し。

この時イエスといふ一人の賢者現はれぬ。(もしこれをしも人

こいふべくば。何こなれば彼は奇蹟を行ひ又道を聞くを好む人の師なりければなり。)彼は多くの猶太人こ希臘人こを從へぬ。(これ即ち基督なり。)吾等の重立たる人の訴に依てピラトス彼を十字架にかけし時、彼を愛する徒は去らざりき。(彼が第三日に復活せしは、聖なる預言者が彼に就て、この奇蹟又其他もろ〳〵の異徴を述べ置きたる如くなりければなり。)彼の名に從て基督教徒と稱する一宗派、今日なほ現存す。

ヨセフスが記事の零碎なる、この著るしき事實を錄するに足らざるやうの觀あるは、前段既に論ぜし如く、自家の不利を顧みて曲筆したるに起因すこ雖も、一には老來浩瀚の著作に倦みたるにも由來すべし。而して上記原文中括弧せる文字は、明に後代教徒の竄入にしてヨセフスの筆意を失ひ、前後の關係こ矛盾せる

事蓋し言を須たず。唯此全文を擧げて後人の僞作こ評し去るは吾等の與みせざる所なり。此文もこエウセビウス教會史第一卷第十一章に、二回までも引證せられたるを以てするも、年代の古きを推知す可く、又歩を讓て、僞作なりこせむか、信徒が何故に前後の關係に鑑みて、巧緻なる竄入を爲ざりしかを訝からざる可からず。吾等は懷疑家ルナンこ共に少くこも前文の一部を眞なりこす。

猶太の律法の釋明註疏をタルムッドこいふ。此經典中イエスの名を揭ぐる事殆こ二十回、讒謗厭惡の言、錄するに堪へず、而も紙背頗る恐怖の狀あるを奇こす。イエスを呼ぶに或はかの者こいひ、或は愚人こいひ、釘殺せられし者、ナザレ人、口にするも厭はしき者などあらゆる賤陋の語を用ゐて烈しき憎惡を洩せるは、使

徒行傳第五章第二十八に、祭司の長が、われら此名に由て敎る勿れと禁ぜしに非らずや。然るに汝等は其敎をエルサレムに滿し、又この人の血をわれらに負しめんとすと罵りて、イエスの名を敢て言はざるに酷肖す而も此等の暴言を徹して、福音書所傳の證據を認め得るは實に一種の奇觀なるかな。即ち彼がタビデの統を享け、埃及に行き逾越節の前夜に刑せられ、又ガリラヤの諸村に奇蹟の行ひし事凡べてタルムッドに其反映を見るなり。イエスの靜冽なる傳敎は、政敎の主權に矯激の反抗を試みたるにあらず、猶太人がイエスの行を罪とせしは、左道に由て奇蹟を行ひ、又其神位を求しにあるのみ。かくて福音書の傳ふる所と異邦人及び猶太人の文獻との間に何等の撞着を窺ふ能はず。イエスが歷史上の位置と外部生命の主なる事實は、後の二者が證して

明なるものなり

史的根據の最後に來るものは敎徒みづからの記錄にして、新約全書廿七卷これなり。敎會の諸父が傳ふる所、あながちに疑ふ可きにはあらねど、福音書外の新事實をいふなく、又秘經アポクリファに記する所は、後世の信徒が妄想を逞うし、奇蹟を附加し、却て敎祖の威信を傷くるものあり。この故吾等斷じてこの二源泉を却く。而して馬太、馬可、路加約翰諸傳四福音書はいふまでもなく貴重の史料なれど、其他聖保羅が達羅馬人書、達哥林多人前後二書、達加拉太人書は、極端なる懷疑派の評家も、其眞なるを疑はざるものなれば、以てイエス傳の參照たるべきなり。これ今に敎徒が羅馬書、哥林多書を尊崇する所以にして、パウロが証言に徵するのみにても、吾等はイエスが一生の要素を學ぶを得べし。即

ち彼タビデの王統を享けながら、身貧者に生れ、メシヤの教を垂れて、天國の福を示し、其間種々の奇蹟を行ひ、晩餐の式典を創め、難に遭て羅馬の十字架にかけられ、後復活して四十日間諸人に出現したる等の事蹟は、福音書外かの剛邁なる使徒パウロの熱心に主張する所也。

福音書を綴く者は、其標題に留心せざる可からず。四書ともに其冒頭に題すらく、馬太傳、馬可傳、路加傳、約翰傳と。借問す、馬太傳は、イエスの弟子馬太が筆を執て、全卷を綴りしものか。あらず、此書は馬太の著にあらずして、馬太の傳なり。弟子馬太の口より出たる教祖の事蹟談を傳ふるものなり。故に曰く四福音書は四使徒の各より出て其教權を戴きたる傳說なり。而して此傳說が史料として貴重すべき所以は、教祖イエス世を去て後五十年のゝち

又イエスが言行の目擊者にまで、吾等を拉し來るを以てなり。四福音書中路加傳は、古傳の記錄に基て編纂せられたること疑なく、此書の著者は使徒行傳のそれと同一人にして、聖保羅の友なり。史料を選拔し、綜合し取捨したる蹤跡歷々として辨ずべく、全篇の旨趣貫徹して一人の筆意確に見えたり。

馬太傳、馬可傳に至ては然らず。著者全く湮沒して當初の文辭頗る變更せられたりと覺ぼしく、兩々相補綴して、今日の体裁を爲せしものか。紀元二世紀の初にありしヒエラポリスの長老パピヤスは初代教會に權ありし學僧にして、終世教祖の言行を抄錄せし內、ペテロの追憶記に據て、馬可が編みしといふ教祖の言行錄及び馬太の著、希伯來語の教祖法話を擧げたり。謂ふに、これ今日の第一第二福音書が原材にして、馬太傳の著者は、馬可の原本

より、教祖の行蹟を借り、馬可傳の著者は、馬太の原本より法話を移し來りしならむ。要するに馬太傳、馬可傳、路加傳は、使徒馬太の集めたるイエスの法話と、彼得より聞きたる馬可の言行錄とを基礎とせしこと事實に近し。高等批評學に於ては第一第二第三福音書を合稱して、共見福音書といふ。これ三書ともに各章相並置して表圖の如くに列ね、以て通覽するを得べければなり。

約翰傳を稱して、近世の學者は第四福音書と名く。約翰傳に述ぶる所、やゝ希臘哲學の風を帶び、形而上學の傾向を有すること、頗る前三書と趣を異にするより、近代の批判は之に疑惑を挿みて或は後の信徒が僞作に係れりと速了する者あり。然れども冷靜の評眼を以てすれば、內外の證據此書の眞なるを確むるもの多く、エワルドの如き語學者も、ルナンの如き批評家も研鑽の末終

に疑を撤しぬ。何をか外部の證といふ。曰くげにパピヤスが此書を擧げざるは說明し難けれど、ポリカルプに、イグナチウスに、又二世紀に於て、ユスチンマルチル、タチヤヌスの諸父が此書を引證し、又これが爲め感化せられたるを始とし、早くより東西の敎會に於て、經典に編入せられて、異端の徒亦之を認めたるは極めて有力なる證據にあらずや。何をか內部の證といふ。曰く記事の或點に極めて細緻なるは、既に僞作の說を破するに足る。加ふるに全文希伯來の色彩を帶び、優に著者が猶太敎念の智識に精かりしを示し、又自己の信念に不利なる事實を曲庇する傾無きと共に、私事を語り、追憶を述べて、淸新の氣言外に潑剌たる所、イエスが謦咳に接して、活泉を口にせる人の作ならずむば、殆ど說明に苦まむこと。然らばこれゼベダイの子ヤコブが同胞なるヨハ

子の作か。少くとも此傳統が心に秘めし教祖の俤を寫し出でたるものならむ。ルナンは共見福音書と第四福音書とを對して其各に配するに、ソオクラテスの傳記としてのクセノフオンの著と、プラトオンの書とを以てせり。吾等は若干の斟酌を以て此類例を當れりと思惟す。後篇述ぶる所專ら共見、第四の二傳に基けるものにして、辨証のこちたきは此緒論に擧げたる原材に就て心ある人の研鑽に任せむかな。

二、降生及び少壯

それイエスはヘロデ王の時猶太のベツレヘムに生れぬ。想起す千九百餘年の昔、空靜に星明に、霜をく夜の曉近く、そのあたりに羊牧ふ者、野に居て群を守りたりしに、主の天使來りて、榮光彼等

を環り照しければ、大に畏みて打俯したり。天使、いひ給はく懼るる勿れ。われ萬民に關はる大なる喜の音を告げむ。それけふダビデの邑に於て、汝等の爲に救主こそ生れさせ給へ。これ主基督なり。布に裹みし嬰兒の馬槽に臥したる其徵なりと。倏にして大衆の天軍あらはれ、天使と共に神を讃めて、歌ふらく、天上ところには榮光神にあれ。地には平安なる人に恩澤あれと。牧者乃ち相携て嬰兒を覓めに往きぬ。

是より先ガリラヤのナザレ邑なるダビデの裔のヨセフが聘定の處女マリヤの許に、神よりガブリエルといふ天使を遣はされたり。告げて曰く、慶たし、幸なる者よ。主汝と共に在ます。女のうちにて幸なる者は汝なる哉と。處女この告託を訝りて思わづらひたるに、天使いひけるは、マリヤよ、懼るゝ勿れ。汝孕みて、男子を生

まむ。其名をイエスと定む可しと。ヨセフも亦同じ事を夢みて心に愼みぬ。

其比天下の戸籍を査ぶる詔羅馬皇帝アウグストより出たり。これクレニオがスリヤを管理し時の初次に行はれたるものにして、羅馬人が撫民の政策に巧なる、猶太の民情に逆て、人心を激せざらむが爲め、彼等が家系を重ずるの甚しきを察して、人各が祖先の地にて錄籍を行ひたれば、ヨセフも亦ダビデの邑ベツレヘムに往きて、民籍に登かむとせり。樂園の俤ありといふナザレの村郊を出て、南方三十里、數日の行程を經れば、聖京の榮華なほ昔日の盛觀を忍ばしめ、其夕終に祖先の地に達しぬ。東邦の習として、客舍は路のべの石室に過ぎず、多くは自然の岩窟に沿ひて築きたるものにして、之を二房に別ち、一は旅人の枕とする所、他は馬

牛の眠るに任ぜり。謂ふに、此日旅客既に一室を滿して、ヨセフ、マリヤと共に馬槽の傍に踞したるならむか。萬邦の宗教を通覽するに、其教祖は、おほむね玉樓の人と生れ、顯貴の家に養はれ、而も飜悟して、天道を闡明したるもの多かるを、神の子と稱し、萬民の救主なりといふイエスの降生が、此蕞爾たる小邑に於て、牛馬の傍に起りたる、げに留心すべき所ならずや。曩に天使に敎へられたる牧者は、此石室の口に於て嬰兒を見、敬虔の意を捧げて之を拜せり。

イエス降生の時に當て、文明の世界は實に非常なる改變に際したるなり、政治の傍より之を見むか、羅馬帝國の榮華其極に達し、皇帝の稜威天下に洽ねかりしが、其裡はやく禍亂の萠芽を胚胎して、衰頽の機業に既に目睫の間に迫れり。カイザルの智謀アウ

グストの施政を以てするも、頽廢の世運は沮む可からず、テベリオの晩年は弑虐兇暴の史を以て濟がさる災禍荐りに至り、戰亂猛を極め、爭鬪已む時なく、偃武の日、また暴戾を免れずとタナツスが後日の史を論せるは、亦假りて此時代の暗黑なる裏面を評するに足らむ。猶太は特に暴君の聚歛に疲れ、異邦人の侮慢を被り、預言者が第四帝國といひけむ羅馬帝政の下に、祖先の教化を蹂躪せられて、聖都宮殿の階上に煩細なる律法の註疏を試むるのみ。

萬邦の民が宗教に關する觀念も亦是時錯亂を極めたり。古代多神の教、既に民心に確固たる根蔕を有せず、民衆は徒に外邦珍奇の淫祠を崇拜して、益々放縱の俗に流れ、心あるの徒は、僅にストイクスの峻冷なる哲理に遁がれ、世道日々に非ならむとす。而し

て何日となく、天下を革變して、清新の生命を、萬邦に與ふるもの、世に出でむとすといふ思想は、當年の文明世界を風靡したるが如く、羅馬の詩人エルギリウスが第四牧歌に、神兒の降生を預言したるを始とし、ピュタゴロスの教徒、オルフィクス祭司の類、皆新世紀の曙近けりとなせり。史家タナツス、スエトニウス、又ヨセフス等の証する所を以てするに、聖者東邦に出でゝ、天下を動さむとすとの信念は、萬邦に洽ねかりしと明なり。猶太に於ては、古昔よりの預言に、律法の刷新を成すべきメシヤの來臨を說きしもの、舊約書の骨髓として存せしが、基督紀元の始に近きて、益々この渴慕高まり來り、熱烈なる翹望、民衆の間に漲りぬ。唯古の預言者がメシヤを以て純なる宗教上の贖罪主とし、神の僕、悲哀の人と思へる觀念此時忘却せられて、將に來らむとする救世主は猶太

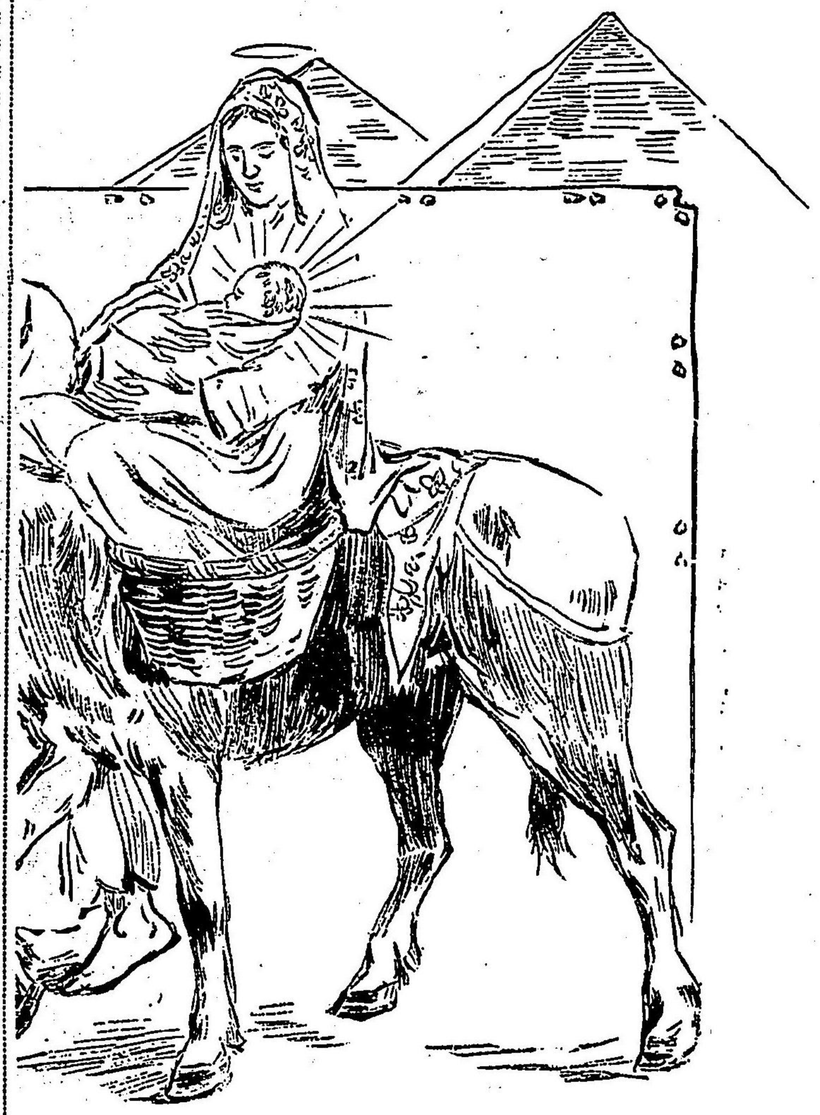
を萬邦の上に高め鐵の鞭もて、彼等を撻ち滅す者ならむと誤解したるなり。されど要するに當時の猶太人は救主に關する預言を信じ、猶太國の存する時に於て、又聖殿破壞以前に、又大なる預言者の後に於て、彼現はるべしと認定したり。

昔預言者米迦がベツレヘム、エフラタよ。汝は猶太の郡中にていと小さき者なり。されど以色列の君たるべき者、汝のうちより出でむと述べしこの孤村に於て、イエスは異邦人も、猶太人も、異常の改變を待ちたるの日に生れたり。この時博士東方より聖京に來りて曰く、猶太人の王として、生れたる者何處に在すや。我等東にて、其星を見たれば、彼を拜せむとて來りぬと。博士とは希臘の語葉にて、マゴイといひ、波斯或はカルデヤの僧にして天象の學に精しく、星宿の變異を察して、邦家の運命を卜し、かねて賢哲の

士を求めたる徒なり。ソオクラテエスの死を預言し、プラトオンの墓に參じたりし等の事、古代より傳はれるにても、當時世運を轉更すべき聖者、東邦に出でむとの說行はれたるに際し、顯著なる天變を見て、猶太に尋ね來りしと素より怪むに足らず。

近世天文學の推算に據れば、イエス降生の頃、燦たる新星實に天の一方に出でたる如し。千六百四年九月、雙魚宮に於て、土星木星火星の交會ありし時、其傍に第一位の光を有する新星現はれぬ。金剛石の如く、光芒爛として色彩を變じ、星雲にあらず、彗星にあらず、出づること二年、終に滅せり。ケプラアが推算に從へば、此等三星同宮に集りしは昔羅馬建都七百四十八年に於てせし事明なるさへあるに、雙魚宮の躔度は、宛も猶太の分野に該當するを以て、當時の博士等刻下の時運を酌量して、東方より來りしと決し

て訝べきにあらず吾等虛架空說の誕生なるを疑ひ近代科學の發達せるも却て證據所とする



りしは實に一奇と謂ふべし。

ヘロデ王是に於て大に心痛す。彼祭長司と學士を集

て、基督の生べき地を問に、皆古來の預言に據て、其ベツレヘムなるを答へたれば、かの博士等に命じて嬰兒の居處を覓めしめたり。後世の傳說に據れば、博士其數は三人にして、黃金、乳香、沒藥の禮物を齎らしたりといふ。新星の導くまゝゆきて、ベツレヘムの村舍に入り、イエスが伏したる前に跽きけるが、夢にヘロデの宮に返る勿れと默示を蒙り、他の途してその國へ歸れり。ヘロデ暫らくして、博士等が己を欺けるを知り、ベツレヘム附近に於て、二歲以下の嬰兒を盡く殺せしに、此時ヨセフは神託に由て、妻マリヤと共にイエスを携て既に埃及に去てあらず。驢馬のあゆみたどゝしけれど、リノコルラ河の彼岸まで、僅三日の路程のみ。此水スリヤ、埃及の境を流れてヘロデの統轄を限れり。

惟ふに、イエスが埃及に滯まりしは、極めて短きひまなりけむ。幾

くもなくして暴君ヘロデの死きこえければ、ヨセフは嬰兒と母とを挈へて猶太に歸り、先づ祖先の地ベツレヘムに居をトせむと思ひたれど、アケラオ、父に代て位を繼ぎたりと聞き、志を變じて復、故邑ナザレの胸に歸りぬ。此間イエス降生後、未だ一年を經ざりしが如し。今日西歐の諸邦が用ゐる基督紀元は、六世紀の僧ヂオニシウス、エクシグウスの制定に係り、數年の誤算あるを免れず。近世の研究は、ヘロデ王の死、紀元前四年三月の月蝕等に前提を置きて、イエス降生を紀元前四年二月以前にありと改めたり。

かくてイエスが、其生の曙を送りしナザレの故里は、花靜に、草柔かき地上の樂園なりき。抑もパレスチナの國を北より南に劃てば西の方地中海の蒼冥を控へたる沿海一帶の地あり。カルメル

の山、海に趣きて其北を閉ぢたり。東の方又一帶の丘陵起伏して、自ら脈を作り、ヨルダンの谷に臨む。ヨルダンの谷、葦の葉のさゝくなりて、南北の端にガリラヤの湖と死海とを泄ふ。なほ東の方、モアブ、ギレアデの峯、紫にほひて曙、夕榮のたゝずまひ、萬軍の主が稜威をあらはす。而してヨルダンの西、沿海の東、エズレエルの平原は丘陵の國を横斷して、之を北の方ガリラヤ、南の方サマリヤ、猶太の三部に分てり。

ガリイルとは希伯來の語葉にて、圈といふ。昔ソロモンがヒラムに與へしケデシユ、ナフタリの圈内なる十二の都邑を名けたるものなれど、世を經るに及むて、益々諸人の輕視する所となり、又夙くより諸邦の民來て住せしかば、異邦人のガリラヤと呼ばれて聖京の民より區別せられぬ。亞刺比亞フイニシヤの人をはじめとしイエスの日に於ては、希臘人多く遷り住みて其語葉も廣く行はれたり。されど此國の草木は、清妍の姿を盡し、山川また優雅の趣きなしとせず、磽确にして幽愁のかぎりを現はせる聖京の附近には遙たち優りたり。まことに、これ雅歌の作者が、豊麗の辭もて愛する者の里と咏じけむ此世ながらの樂園なり。ルナンの語る所に從へば、この土地の春闌けて、三月、四月の候に至れば、たゞしへなき清明の色、其花にあらはれ、葉陰に憩ふ獸類の小いさげに溫和なる、或は山鳩の雅びなる、青鳥の輕げに草の葉をも曲げてその上にとまるなど、未見の人を誘ひて遊志あらしむ。げに預言者以賽亞が、昔はセブルンの地、ナフタリの地をあなどられしめ給ひしかど、後には海に沿ひたる地、ヨルダンの外ふの地、異國人のガリラヤに榮を享けしめ給へり。幽暗をあゆめる民

は、大なる光をみ、死蔭の地にすめる者の上に光てらせりといひしは實にこのナザレに世を動すべき大勢力の生るゝを示しゝなり。

イエスが三十年の花園となりて、このめづらかなる蒼をはぐゝみ、機熟し葩そろひたるの候に、にほひやかなる花輪を開かしめたるは實に此ガリラヤのナザレ村なり。石灰石の丘破れ、細流迂徑の通ずる所閑麗なる一村落あり清泉迸り出でたる古の井筒は壞たれたれど、このほとりに集ゐけむ女の美は、パレスチナ全州其比なく、今日もなほあえかなる容姿を傳ふ。六世紀の教徒アントニヌス、マルチルが遊記に據ればこれ生神女マリヤの資なりといふ。今ガリラヤに筇を曳く者、信となく、不信となく、ナザレの高丘に登て、世界史の一轉せし中軸を思ひ、萬感交々來て低徊

去るに忍びざるも實に宜なるかな。此地以色列の中奥に位すれど、昔より萬民の戰場にして、アマレクの槍こゝに輝き、セソストリスの弓弭もこゝに響き、マセドンの方陣もこゝを蹈みぬ。イエスの後千年、十字聖軍またこゝに東西の武を鬪せり。而も萬古の蒼穹は、この樂園を蓋ひて歳々花同じといふ。

此間イエス、ナザレに居て、父母に順ひ、智惠も、齡も、彌增りて、神と人とに益々愛せられ、父の職を助けて、木匠なりきといふの外、福音者の語る所なし。たゞ國の習として、年毎の逾越の節筵には兩親とつれだちて、エルサレムに往けり。逾越の節筵とは、昔以色列の民埃及の幽囚より免れて、カナンの地へ徙れる紀念の祭にして、此時エルサレムの宮に上ぼるを京まうでといふ。詩篇に見えたる諸の美しき歌が証する如く、はらから相睦みて、偕に居る樂は

猶太人の胸裏にいつまでも溫なるものなり。イエス十二歳のときは逾越節、卯月八日に當りけむ。ヘルモンの麓に添ひ、エズレエルの古趾を横に、羅馬の武夫が屯せるメギドを過ぐれば、シオンの大路を歩む群集愈々多く、涙の谷もいつか後に、莊麗の輪奐、眼を眩まして聖京の門に達しぬ。路加傳の著者に從へば、父母此時群集の混雜にまぎれて、イエスの姿を失ひ、三日の後殿のうちにて、終に彼を尋得たるに、教師の間に座し智慧深き問答して、彼等を駭し居るを見たりといふ。

吾等は是に於て、わかきイエスが教育を知らむと欲す。幼少の時村落の教堂に出入して、初歩の智識を學びたるか、或は家庭にありて舊約の諸書を抽讀せしか。要するに、イエスの秀拔なる世界觀は、其心裡より湧出たる直觀にして、當時の哲學に負ふ所なし。

イエスと其使徒とを目して無學の輩こせしは當初より法敵が襲用せる套語にして、諸ての奥義と學術に達するも、愛なき人は今も好で基督の徒を罵るに此語を以てす。而して之にも拘はらず、イエスの言行を錄し、基督教の史を究むる人は、一方に於て、イエスがパリサイ、サドカイの徒に負ふ所あるをいひ、フィロ、ヒレル等の學派に私淑せりとし、甚しきは希臘哲學に參するものありと速斷すれど、靜平の批判は終に其妄を破して餘すなし。

次にイエスは何の國語を以て傳教せしか。當時希伯來の古語は既に全く死語となりて獨り學儒の間に知られたるのみ。されどイエスが舊約書より引證したる章句に原文の姿あるを以て考ふれば、或は古語の智識を具へたるが如し。されど家庭交友の間には、勿論アラメヤ語を用ゐゴルゴタ丘上、詩篇を咏ぜし時も、此

俗語を發せり。而して羅甸語に達せしこいふは少しく疑はしけれど、當時ガリラヤに洽ねかりし希臘語に至ては必らず其幾分を理解したりしならむ。

イエスがまた文字を解したるの明證は、馬太傳第五章十八なる、律法の一點一畫といふ語、又身を屈め指にて地に畫けりといふ約翰傳第八章六の句にても知る可し。當時の家庭には、少くとも舊約書中の一部を藏したるなれば、イエスは幼少より是等の聖典を暗じ浮べたりと覺ぼしく、傳敎の中、舊約の引證頗る多けれど、律法は其極めて喜ぶ所にあらず。以塞亞、耶利米亞、但以理、約耳、何西阿、米迦、撒加利亞、馬拉基等の預言書に重きを置き、特にかの崇高と優麗とを兼ねたる詩篇、百五十章は、常に朗吟愛誦して措かざりしものなり。かくて希伯來の詩王が抒情の歌、熱烈なるア

モッの子が預言に、天禀の才德を養ひ、風光明媚なる故園のうちに、イエスは其壯年に達せり』

三、傳敎及び迫害

羅馬皇帝テベリオ在位の十六年、イエスおよそ三拾歲のころ、ポンテオ、ピラトは、猶太の方伯となり、ヘロデ、アンチパス、ガリラヤの分封の君たりし時、ザカリヤの子ヨハネの名聲は、パレスチナの全州を風靡せり。ベブロンの邊陬に生れ、祭司の族に屬し、熱烈燃ゆるが如き宗敎想を有したる彼は、當時民心の動搖を、逸早く感得して、基督が降生を望むを切なり。駱駝の毛衣を着、腰に皮帶を束ね、蝗蟲と野蜜とを食ひて、ヨルダンの深谷に下り來りぬ。預言者馬哈基が、視よ、爐の如くに燒くる日は來らむ。凡て驕傲る者

と惡を行ふ者とは、藁の如くにならむ。されど我名を恐るゝ汝等には義の日出て昇らむといひしは、當時の猶太國に傳播したる思想にして、救世主降臨の前に當て、民心の改悛を促すもの多し。されど彼等の義だしとする所は、摩西が定めたる古來の律法を遵奉するの謂にして、精神の根本的革新にあらざりき。ヨハ子の見は然らず。其尚ぶ所は儀典にあらずして、道義なり。パリサイ、サドカイの狹隘なる保守觀にあらずして、清新の道德的革命にあり。呼はる者の聲きこゆ、云く汝の野にエホバの途を備へ、沙漠にわれらの神の大路を直くせよ。諸の谷は高く、諸の山と岡とは低くせられ、曲りたるは直く、崎しきは夷にせらるべし。かくて神の榮光あらはれ、人皆ともに之を見むと以塞亞が預言したるは、ヨハ子が使命の骨髓にして、叱咤奬勵の氣殆ど聽者の正視を許さ

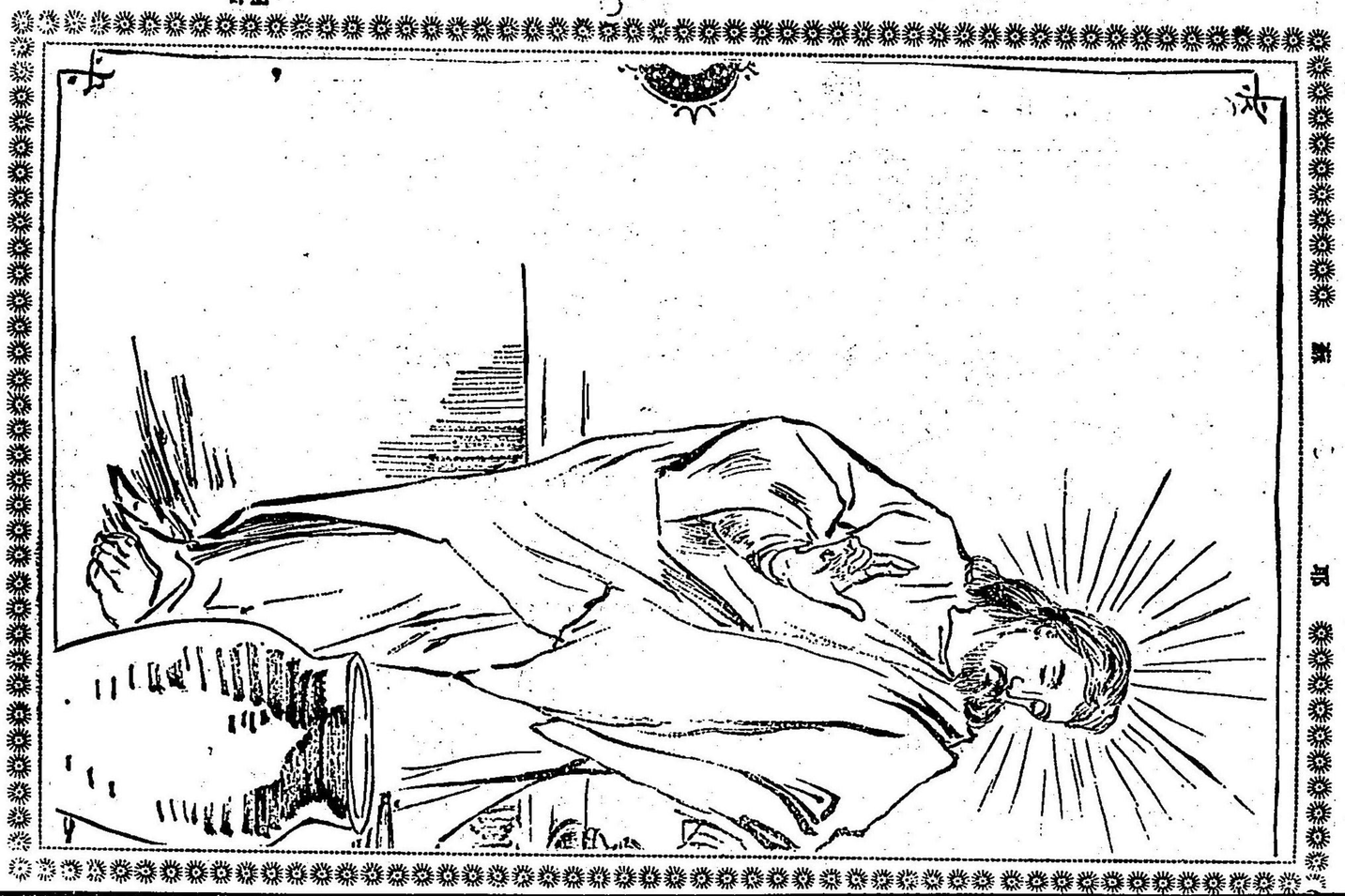
ざらむとす。嗚呼蝮蛇の裔よ誰か汝等に來らむとする怒を避く可しと告げしやとは僞善の學徒を罵れる義憤の語なり。斧は樹の根に置かる。凡て善果を結はざる幹は伐られて、火中せられむとは流俗の改悛を促せる勸なり。國内の人および聖京の民も亦來て、其罪を認はし、葦高きヨルダンの流に、洗禮を享け且つ彼を基督なるかと問ひたるに、ヨハ子答て云ふ、我は水を以て、洗禮を汝等に施へり。我より能力ある者、後れて來らむ。我は其履帶を解くにも足らず。彼は聖靈と火とを以て汝等を洗すべしと。イエス此時才德既に熟しナザレの故邑を出で、洗者ヨハ子の許に來て、受洗を乞ふ。ヨハ子辭みて曰く、我は汝より洗禮を受くべきものなるに、汝反て我に來る乎と。イエス乃ち答ふらく、暫く許せ、かくすべての義き事は我等盡すべきなりと。彼律法を破らむとて來

りしにあらず、之を完うせむ爲に降りぬといふを證せるなり。乃ちヨハネの手に受洗せられて、水より上れるとき、天忽ち開け、鴿の空より降るが如く、神靈其上に臨みぬ。

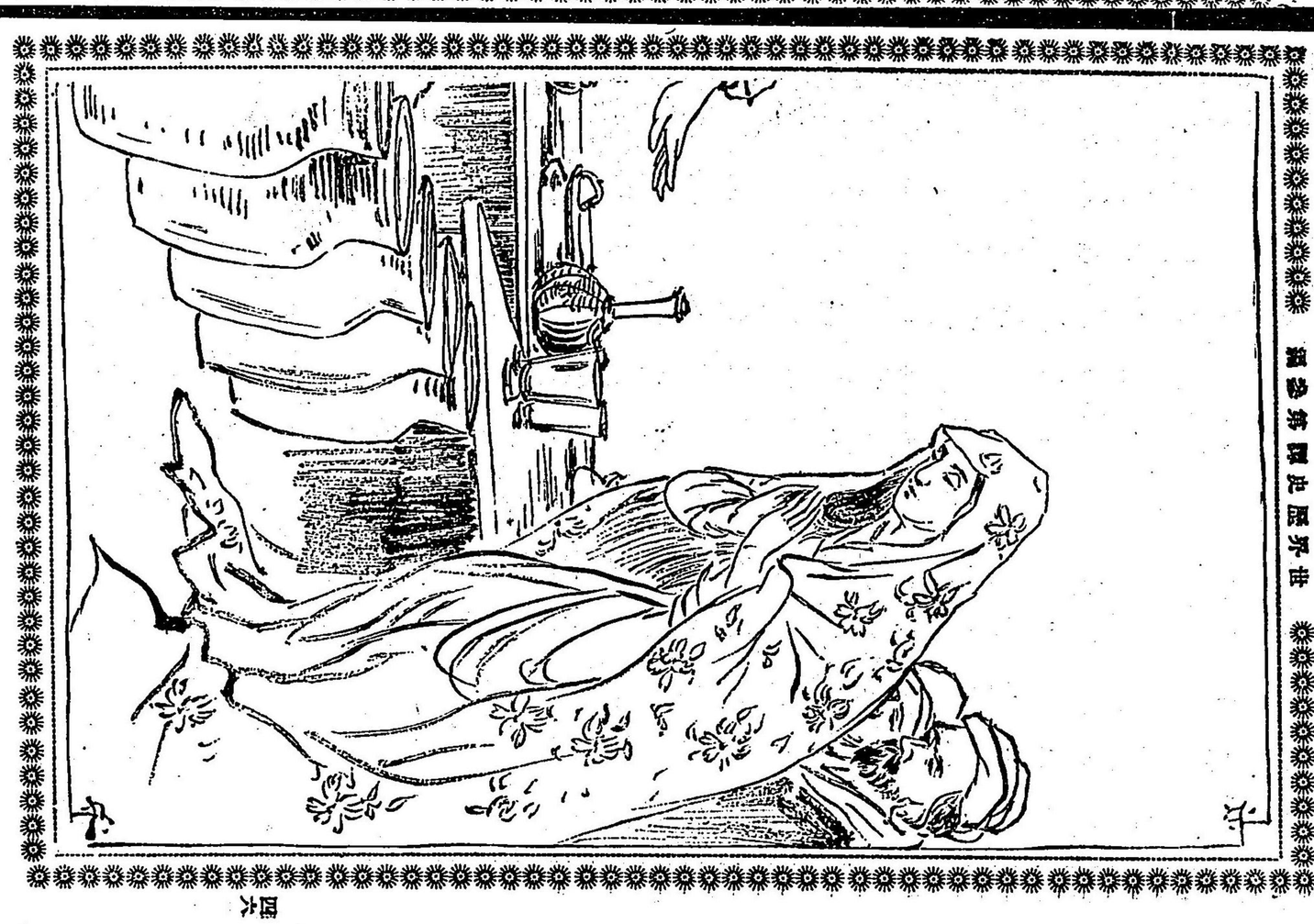
ヨルダン河の受洗は、實にイエスが傳敎の生涯を創めたる一轉機にして、これより數年世界の歴史を變ずべき活動は起りぬ。イエスヨルダンを離れて暫らく野に往けり。傳說に據れば、エリコの南、死海の傍に聳たる沙丘のうち、四十日四十夜食ふ事なく饑たるに、試むる者來て曰く、汝もし神の子ならば、命じて此石を麵包と爲よと。これ肉慾の誘惑なり。イエス之を却くるに、申命記第八章三の句を以てす。人は麵包のみにて生くるものならず。唯神の口より出づる凡べての言によると。惡魔こゝに於て、彼を聖京に携へゆき、殿の頂に立せて曰けるは、汝もし神の子ならば、己が

身を投ぜよ、蓋し汝が爲に神、其使等に命じて支へしめむと。これ肉慾の誘惑にあらずして、誤迷せる宗敎想なり。イエスまた申命記を引きて答ふ主たる汝の神を試むべからずと錄されたりと。惡魔終に彼を高山の巓に携へゆき、萬邦と其榮華とを示し、彼が功名勢威の慾を動かさむとす。これ達人の大觀せむと欲して得ざる所、心高く氣昂りたる智者が最後の弱所なりとミルトンのいひけむもの茲にあり。惡魔乃ち試て曰く、汝もし俯伏して我を拜せば、悉く此等を與へむと。イエス三たび申命記第六章十三を引きて、サタンよ、退け。主たる汝の神を拜し、唯これにのみ事ふべしと錄されたりと。惡魔この誘試皆畢りて、暫らく彼を離れぬ。

こゝに、イエスは復ヨルダンの谷に歸り、敬虔なるガリラヤの若人、アンデレ、ピリポ、シモン等の弟子を得、又無花果樹の蔭に冥想



圖十四



圖十五

せるナタニエルをも從へたり。歩を轉じて、西北ナザレの故里に向ひ、エズレエルの青野を横ると三日、カナの地に近親の婚筵ありて、母マリヤと共に臨みぬ。故舊相會して盃をあげ燈の華に新婦の福をなす。何ぞ平靜溫籍にして預言者の獅子音と違ふの甚しきや。僞善を惡み、嚴格を好まざりしイエスが、決して世のつねの罪なき歡樂を避けざりし事は、ヨハヂの弟子嘗て斷食に就て尋ね問ひたる時、新郎の友、その新郎と偕に居て、哀むを得むや。新らしき布もて、舊るき衣を補ろふものはあらじ。新らしき酒を舊るき革囊に盛る者あらむやと答へたるを以て知る可し。この夕燈明く興酣なる宴半にして、會々酒つきたるに、イエスは始めての奇蹟を行ひて、水を酒に變じぬ。

洗者ヨハヂの道を宣べたる所は、死海のほとり、岩碎け、水黑き憂

鬱の沙原なれどイエスが歩を徙して、新法を傳へたる地方は、麥の穗の豊に撓みて、花の色あざやかなるカペナウンの邑なりき。鳩の谷といふ地を過ぎて、北の方琴の湖といふは、世に著るしきガリラヤの海にして、香よき花の咲き亂れたる岸には、水鳥の巣さはに、サフドの峯より眺むれば、黃金の盃によき酒もりたらむやうなり。この秀麗なる風土に於て、イエスは暫らく其族と共に居て、父なる神の愛を述べ、古の律法の完うせらるべきを說くこと少許、春さり來りて、逾越節近き、エルサレムに上りたるに、聖殿のうち、牛、羊、鴿を賣る者と兌銀する者の坐せるを見て、神の宮の瀆さるゝを憤り、凡べてこれらの商賈を追出して、急激の改革を行へり。このときいかなれば多くの群集は、最初の驚愕より、恢復して、イエスを害せむと謀らざりしか。洗者ヨハヂが尊崇せし此

ナザレ人を畏れたるが故か。蓋し其言の理あるに服し心耻たるを爲ならむ、時に唯祭司學士の徒は、喙を容れて、何の權威を以てこの改革を行ふやとイエスに問ひ、且つ神よりの徵を求めたり。イエス徐に答へて曰く、この殿を壞つとも、我三日にて再び建むと。聽者曉らずして默しぬ。イエスが弟子たちも、當時其意を解せしものなく、後、復活の事蹟を見るに及むで、始めて彼が聖殿といひしは、其身體なりしを感得したり。

此時洗者ヨハネは、水豐なるアイノムの地に遷て、尙も悔悛を勸め、洗禮を授けたるに、イエスが弟子に命じて猶太の地に滌禮を行ふに就くもの頗多かりければ、ヨハネの弟子は其師に就て、イエスが權能の盛なるを訴へたるに、ヨハネは此時高尙なる克己を以て答ふらく、我は基督に非らず。唯其先に遣されしもの也。彼

は必ず榮ふべし。我は必ず衰へむと。幾もなくしてヘロデ、アンチパスの爲に執へられて、獄につながれぬ。イエス乃ち難を避けてガリラヤに向ふ。道サマリヤを經ずして、行く能はず。

サマリヤは猶太、ガリラヤの間に介まれて、古くより、獨立の崇拜を有し、約書亞が祝福を下し、アブラムが其子を犧牲にせむとしたる此國のゲリジム山はソロモンの聖殿を築きたるエルサレム、と聖を爭ひたり。されば此蕞爾たる一宗派は常に猶太人の憎惡を被むると異邦人よりも、甚しく、アロンメオチニムの魔樹の下に、ヤコブが埋め置きたる神符耳環の類を崇拜する者として、惡魔の敎徒に伍せられ、其麵包を口にする人は豕の肉を食ふが如しとさへ云ひ傳へぬ。イエス黎明に猶太を出て、朝陰のあるひまを急ぎたれど、サマリヤの里、スカルといふ邑に達せしは、日

既に中せる時なりき。この國の五月は炎暑もゆるが如く、西の方エバル、ゲリジムの峯は涼しげなれど、東シケムの原、露既に消えて行旅の疲れ、急に堪へ難く、乃ちヤコブの井といふ深き泉の傍に座し、弟子を遣はして近村に食を乞はしむ。この時一人の婦あり。東邦の習として、雅びたる水瓶を携へて、近より來りければ、イエスは靜にそのサマリヤ人に向て、我に飲ませよといふ。女愕て曰く、汝は猶太人にして、何ぞサマリヤの婦なる我に水を乞ふやと。昔より交を絶ちて、反目仇視せるこの國の人、而も女人に向て、猶太のラビが親しく物言ふを訝りたるなり。この女はもと浮きたる生涯を送りて、五人までも、夫を先てたるものなれど、イエスと暫く物語るうち、其半生を看破せられ、彼が威貌と婉容とに感じ、はしなく語を轉じて當時爭を極めたる宗教の疑問に及びぬ。曰

く、主よわれ汝の豫言者なるを知れり。されば問はむ、我等の列祖はこのゲリジムにて神を拜し、汝等猶太の人は、エルサレムにて拜す、其何れか正しきと。イエスは此時、其教法が一國一邑のものにあらず、萬邦の民に宣傳へて、人類の運命を救ふべきものなるを證したり。曰く、婦よ我を信ぜよ。唯に此山のみに非ず、亦エルサレムのみに非らずして、汝等父を拜すべき時は來らむ。又汝等常にメシヤの降臨を望めり。今汝と語る我はそれなりと。婦大に畏みて、水瓶を投げ、邑に走りゆきてところの人と共にイエスに從ひぬ。

豫言者は其故里にて尊ばるゝ事なしと知りたれど、イエスはなほ歩を進めて、ナザレの故園に歸り、例の如く安息日に會堂に入りて、聖典を讀み、以塞亞第六十一章の破題を吟ず。主の靈われに

臨めり。こは神われに膏を沃ぎて、貧きものに福音を傳ふることを委ね、我を遣はして心の傷める者を醫やし、俘囚にゆるしを告げ、主の禧ばしき年を宣播めしむと。語訖りて滿堂蕭やかなる時、これに向て曰く、この錄るされたる事、けふ汝等の前に應れりと。

ナザレの民は、此自讃の言を聞きて、慊然たらず、こは木匠ヨセフの子にあらずや。何ぞ自ら任ずるの甚しきと。聲を合せて、イエスに神の徵を求めたれど、彼はエリヤ、エリシヤの故例を引きて、奇蹟を行はざりき。民是に於て大に激し、郊外の絶壁より之を投殺さむとしたれど、ものとはなしに神々しきイエスの威容に懼れて、終に其去るに任せり。

イエスこれより永く故園を去て復歸らず。湖畔花紅なるカペナウンに留りて、ガラリヤの諸方を歷遊せり。この年はイエスが最

も盛榮ある活動の期にして、主の禧ばしき年といふ。地は宛もダマスコへ上る水運の衝に當りて、萬邦の民多くこの繁榮なる都邑に聚り、教化最も便よき所なり。この間くさ〳〵の奇蹟多かるうち、特に吾等の意を惹くは、カペナウンに於ける一安息日なり。

朝に會堂にありて、天國の教を傳ふるとき、惡鬼に憑れたるもの大聲に喊びけるは、噫ナザレのイエスよ。我等汝と何の干かあらむ。來て我等を滅す勿れ。我汝の誰なるを知るとイエス之を責めて曰、けるは、聲出す勿れ。其處出でよと。鬼終に去て其人醫たり。衆人皆駭き相顧て語らく、權威と能力とを以て汚れたる鬼に命ずるものこれ何人ぞやと。イエス會堂を出て、弟子シモンの家に至れば、其妻母重き熱病を患ひて、床にあり。彼其傍に起て熱を斥めければ、病直に退きぬ。この夕、日落りて安息日の終るを待ちあへ

ず、人々すべての病を患へる者、鬼に憑れたるものを携へて、湖のほとりに集ゐ、イエスがシモンの家を出づるを望む。夕榮のそら靜かなる波の上に薔薇の紅を映して、みそら澄みわたり、自然が面のたとしへもなく美しきに、足痿へたる者、癩病にくづれたる者、えやみに顫へたる者、人間の不幸、憂は、其醜き凡べての形を此所に現はし、靜なる宵の空も、鬼に憑れたる狂者の聲に亂さる。清洌の聲、鈴の如く、青き袍を褻げて、此間を歩むものゝ容姿は如何なりけむ。傳説のいふ所に從へば、イエス壯年の時、少し波うてる髪は葡萄の美酒の色にして、頸まで長くたれ、ナザレ人の風によりて、頭の半にて分ち、眉秀で色白く、胡桃のいろの鬚、長きに過ぎず、鼻と口とは美妙の趣を盡したり。語る時は溫籍の氣聽く者の心を醉はせど、戒むる時は萬軍を叱咤するの勢あり。而も其眼の

美はなべてこの世のものならず。此日の奇蹟の噂洽くスリヤ全州に播りて、ガリラヤはいふも更なり、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダンの都邑よりこの休徵を見、其教を聽かむとするもの集り來りぬ。

秀でたる山川の姿に醉ひ、極みなき星月夜の下に、神の世の近きを夢みて、魚豊なる湖の胸に眠りたる漁者の群は、擧りてこの新らしき道に耳傾けたり。靜なる宵のそらに、いさりびのかげにゐれば、げにかうやうの夜にこそ、ヤコブはハランの石の枕に、天つ橋立を御使の昇降るを夢みけめ。才薄く、學暗しと雖も、彼等が信は、其溫情に養はれて固くなりぬ。イエス弟子等と蒼空の下、湖の邊に坐して法を説きしが、群衆かぎりなく推あひ來るを以て、舟に登り、人々を岸に立たしめて教を傳へ、又ある時は近き丘の上

に夜の露を厭はず、靜思冥想に神氣を養ふを常とせり。其好て逍遥せし地は、ハナインの峯といふ鬱蒼たる峽、鳩の谷に連れる高丘なり。玆に彼は後、福音を天下に宣傳ふべき十二人の使徒を選び、諸の能力を與へたるうち、雅各約翰彼得の三人には殊更の使命を授けたり。雅各は後、殉教者の群にありしことのみ聞えて事蹟終に傳らざれど、他の二人は、基督教傳播の史に重大なる感化を有せるものにして、約翰が幽玄にして、考思に富み、雷の子の綽號も空しからで、靜逸のうち熱烈の氣を湛へたる。又は彼得が率直にして、剛邁なる、思議よりも實踐を尚び、鋭意基督の道を證したる、共に斯教の雙柱にして、兩々相輔佐す。

使徒選定の事訖て、イエスは高峯より山腹に降り、其法を聽かむとて、遠近より集ゐたる群衆に向ふ。草柔なる岩間に坐して、この

驚くべきナザレ人を仰くものは、このころ世に播れるエヽシヤの降臨を思ひ、洗者が叫びし天國の近邇をめぐらして、胸裏の信念鬱勃として禁め得ざらむとす。イエス乃ち口を啓て彼等に教ふ。基督三年の傳教其骨髓こゝに存す。世に傳ふる山上の垂訓即ちこれなり。

心の貧き者は福なる哉、天國は其人の有なれば也。柔和なる者は福なる哉、其人は地を獲べければ也。哀む者は福なる哉、其人は慰籍らるべければ也。飢渴く如く、義を慕ふ者は福なる哉、其人は飽くことを得べければ也。憐む者は福なる哉、其人は憐を得べければ也。心の清き者は福なる哉、其人は神を見るべければ也。和平を求むる者は福なる哉、其人は神の子と稱へらるべければ也。義しき事の爲に、迫害を蒙むる者は福なる哉、天國は其人の有なれば

也。我が爲に、人々汝等を詬り、汝等を迫め汝等を誣ひて樣々の惡しき事、言はむ時には、汝等福なる哉、喜べ

樂め、天において汝等の報大なれば也。汝等より先の豫言者も、斯く迫められたるなり。汝等は地の鹽なり。鹽もし其味を失はゝ、何を以てか故の味に復へさむ。後は用なく、唯外に棄られて踐れむ耳。汝等は世の光なり。山の上に立てる城邑は隱るゝ能はず。また燈火を燃もすや、斗の下に置ず、家に在る凡ての物を照らさむ爲に、之を燈臺の上に置かむ。斯の如く人々の前に、汝等の光を輝かせ。然らば人々汝等の善き行爲を見て、天に在す汝等の父を榮えせむと。神の國に生るゝ者はかくあらざる可からず、初の三福は絶對に、後の六福は、相對に、彼等の資格を說けるものにして、最後に信徒が萬邦の民に及ぼすべき感化を奬說す。

このときに群集の耳は、此靜明にして而も奇異なる法話に驚きぬ。古の豫言者がいふ所、特にかの但以理の語る所に據れば、以色

列の民を救ふべきメシヤの君は、聖殿の階に起ちて、萬邦の君主を跪かしめ、眞珠寶玉のうづ高きを聚めて、此邦の榮をなすべきものなるに、此溫和なるナザレ人は貧賤の富を說き、服從の尊を述べ、悲哀と迫害との幸福をいふ。且つ其宣ぶる新法は、命ずるに非らずして、助くるなり。古の律法は脅迫のそれにして、今の敎訓は慈悲のそれなり。天雲ゐおりたるシナイの巔に、摩西が選民の法を授かりたるは、雷とゞろき、角とよもせる森嚴の朝なりしに、今このメシヤが法を說く所は、羊跳り、鳥歌ふ湖畔の丘上なり。昔は恐と畏とに顫へ、今は和平と慈悲とに撫せらる。もし此傳敎にして冷刻なる聖京の殿階に於てせられむか、ガリラヤ湖畔の純樸なる漁民を動かして、何等の反抗なく、直にこの新らしき生命に浴せしめたる如き効果はあらざりしならむ。

イエスは律法を廢てむとして來りしにあらず、成就せむが爲なり。舊るき律法は流轉のものにして、新らしき律法は常住なり。彼は形式の遵奉を强ひ、此は精神の更生を求む。彼は行爲の則にして、此は恭順の道なり。目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言へるは人の既に聞し所、されど今敎ふらく、惡に敵する勿れ。人もし汝の右の頰を批たば、亦ほかの頰をも轉らして之に向よ。汝の隣を愛みて、其敵を憾むべしとは、人の既に聞く所、されど汝等の敵を愛しみ、汝等を詛ろふ者を祝し、汝等を憎む者を善くし、虐め迫むる者の爲に祈れと。要するに神の國に生るゝ者は、天に在す父の完きが如くに、其身を完うすべきなり。

この新法より來る新らしき生命とは何ぞ。曰く人に見せむ爲に、義を其前に行ふ勿れ。右の手に爲す所を、左の手に知らしむる勿

れ。僞善者の行に傚ふ勿れ。隱微たるに鑒たまふ父は、顯明に報たまふべけれなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。されば生命の爲に、何を食ひ、何を飲み、また身體の爲に何を衣むと思ひ勞らふ勿れ。生命は糧より優り、身體は衣よりも優りたる者ならずや。天空の鳥を見よ。稼くこと無く、穡ること無く、倉に收むることも無けれど、汝等の父は之を養ひ給ふ。又思へ、野の玉簪花は如何にして生長つかを勞かず紡がざれど、げにソロモンが榮華の極の時だにも、其裝この花の一に及かざりき。この故に汝等、神の國と其義とを求よ。さらば此等のもの皆與へらる可しと。○かゝる生命の基たるべきものは何ぞ。曰く人を是非する勿れ。人の目にある纖塵を見ながら、己が目にある梁木を見ざるやと。これ他人の罪を見て、之を定めざる溫恭、之を信ぜざる慈愛、之を識

らざる清淨の德を敎へ、自ら顧みて己を正うすべきを敎へたるなり。又曰く汝等求めよ、然らば與へられむ。尋ねよ、然らば遇はむ。叩けよ、然らば啓かれむと。これ信仰なり。歎じて曰く、窄き門より入れよ。沈淪に至る門は寛く、其路は大きく、之に入る者は衆し。嗟いかに生命に至る門は窄く、其路は細く、之を得るものゝ少きぞやと。垂訓の終に戒愼の語を述べて曰く、この言を聽て行ふ者は、磐の上に家建たる智者の如く、聽けども行はざるは沙上に屋を架せる愚人の如しと。群集此法話を耳にして、其清新なるに感じ、この人は學士の如くならず、權威を有てるものゝ如く敎へ給ふと駭きあへり。

基督敎の精髓は、後代萬邦の民、百代の世が、如何なる色彩を加へ、聲調を變じたりとも、實に此山上の垂訓に基す。イエスが敎は、幽

玄なる昔の秘敎にあらず、精緻なる諸邦の哲學にあらず、まして功利に考へたる世智の完全したるものにあらざるなり。彼が猶太敎を脫し、又異邦の宗敎と異りて、人心を支配せむとする獨創の點は、神人の干繫を、父子の情と同うして、歡多き愛の敎義を發見したるに存す。イエヽの神は吾等の父なり。其欲するがまゝに民を殺し、其好むがまゝに吾等を助くる暴主にはあらず、又以色列の民を選びて、萬邦の上に置かむとする偏狹の君王にあらず。神既に靈を吾等の心に置き、父と呼ばしむ。吾等は僕にあらず、奴にあらず、神の子等なりとは基督の信徒が敎祖の旨意を享けて、居常心に銘する所にして、國家人種の外に立ち、人類の醇化を目的として、熱信の人が百難を恐れざるは、全く神の愛といへる理想に從へばなり。而してイエスが此獨創なる法話を試むるに當

て、辭令の溫籍にして而も宏大を兼ね、說述平易にして俚耳に入りやすきと共に、行雲流水のかけ、野花青草のにほひ、亦これにうつりて、いふべからざる詩趣の淸新掬すべきは、其よく大衆を動かしえたる秘訣なるべし。

イエス此後なほ湖畔の地を巡遊して、至る所に神の國と父なる神とを說き、兼ねて諸の奇蹟を行ひぬ。されど其異徵は決して其神性を誇示し、又諸人を駭かしめむが爲にせられたるにあらず、却て彼は奇蹟を避くるを常とし、百夫長の婢寡婦の子等を癒し、又風浪を靜め、數千の大衆に魚餅を分ちたる等、必數の場合ならずむば、其超自然力を施したること無きは頗る顯著なる事實ならずや。

このころ譬喩を設けて、道を傳へ給へぬ。湖の上に船を泛べ、又路

の邊の丘に踞して、眼に觸るゝ天然の美と、世のつねの生活とに、詩材を求めたり。この体の說話は、猶太の敎に例無きことにて、全くイエスが獨創に屬す。種播の譬といふあり。曰く種まく者、播きに出でぬ。播ける時、路のほとりに遺ちし種あり。踐踏けられ、且天空の鳥に飯まれぬ。又土少き磽地に遺ちたるは、直に萠出たれど、日出るや萎れつ。根なければ枯れたり。或るものは、荊棘の中に遺ちしに、荊棘滋ひ茂りて、これを塞ぐ。沃き壤に遺ちし種ありやがて生え出でゝ實を結べること百倍なりき。聽ゆる耳ある者は、聽くべしと。蓋し種は神の道にして、正しく善心ある者の道を聞かば、よく實を結ぶべきをいふなり。琴の浦のほとり、麥穗既に黃み、禽鳥人を恐れずして、隴畝に喙ひばむ傍ら、薊おひ茂げる荒野に沿ひて、おふさきるさの街路横り、聽者の眼、直に此譬喩の意を會

得して、感動少からざりしならむか。

其後、種々の譬喩多かるなかにも、イエスが大慈悲の心を現はし、賤まれたる收稅官を愛し、汚れたる遊女を宥るしたる愛憐の意よく見ゆるものは、産を破りたる蕩子の譬なり。曰くある人二人の子あり。季子父に曰けるは、父よ、我が得べき産を分予へ給へと。父其いふまゝに與へけるに、幾くもあらぬに季子其産を盡く集めて、遠き國へ旅し、其間放蕩して其分資を皆そこに耗やせり。其時大なる饑饉其地にありて、彼も乏しくなり始めたれば、往きてある家に身を寄せ、其主の爲に、豕を野に牧ひて、食ふに肉なし。省語して曰く、我父の僕さへ食餘りあるを、我は飢てこゝに死なんとす。起て國に歸り、まだ家に入らざる時、父遙に其疲れたる姿を見、趨來て頸を抱き接吻していたはりぬ。子父に懺悔して曰く、

父よ、われ天と汝との前に罪を犯したれば、汝の子と稱ふるに足らざる也と。父其言を聞かざるまねして、僕等に命ずらく、いとよき服を持來て之に衣せ、其指に環をはめ、其足に履穿かせよ。又肥たる犢を牽來て、宰ふれ。我等ほがひして樂まむ。これわが子死して復生き、失ひて又得たればなりと。此時兄は出て田に在りしが歸て家に近く時、樂舞の音を聞き其故を尋ねて怒りぬ。訴て曰く、見よ、われ多年汝に事て、其命に背かず。されどもわが友と樂む爲にわれに羔をだに予し事なし。さるを妓の爲に産を破りたる汝の子の爲には、犢を宰り給ふやと。父諭して曰く、子よ、汝は常に己れと共にあり。又わがもちものは皆汝の有なり。汝の弟は死して復生ける故、われらの樂を爲す、よのつねの事ならずやと。

第四福音者はいふ、そのころエルサレムに猶太人の節筵ありけ

れば、イエスも亦聖京に上ぼりぬと。この祭は籤の節といひて、以士帖の書に精し。この日悲の轉して喜となりしといふを以て、開飲嬉遊を盡すと、羅馬人がサツルナリヤと同じく、もと聖法の定むる所にあらざれば、イエスこのときの京まうでは、近き逾越節に列らならむとしてなりけむ。聖京羊門のほとり、ベテスダの池の廊にて、三十八年の間病衰へたる者を癒し給ひけるに、其日會々安息日に當りければ、猶太人の律法に背きしとて、いたくパリサイの徒が攻擊を被りしに、イエスは靜なる答を以て、神の子の性を明かし、我父今に至るまで働き給ふ。われもまたしか働くなりといへば、猶太人益〻怒てイエスを害せむとす。そは安息日の定を犯すのみならず、神を己が父といひて、自らを神位と齊うすればなり。されど、祭司等が議會の前に牽かれずして免れたるは、聲

望今や群衆のうちに高く輕ろしく罪いひかくる能はざりしに因るされどイエスに對する反抗は、この時より漸く劇しく、聖京の權威ある者に憎まれてよりガリラヤに至るもカペナウンに留るも、パリサイの徒は常に諜者を放ち、主の言動を耽視して、罪狀を具せむと謀りけり。

會々イエス或る所にて、祈禱しけるに、畢りし時、一人の弟子進出て、主よ、ヨハヂ其弟子に敎へたる如く、われらにも祈禱の辭敎へ給へといふ。イエス乃ち曰く、祈る時はかくいふべし。天に在すわれらの父よ。願くば聖名の尊崇まれむ事を。御國を臨らせ給へ。御旨の天に成る如く、地にも成らせ給へ。我等日用の糧を、けふわれに與へ給へ。我等が己れに負債ある者を免るす如く、吾等の負債をも免し給へ。我等を誘惑に遇はせず、惡より拯ひ給へ、亞孟と。簡

撲にして而も餘蘊なき此禱詞は、げに其形式こそ古の猶太教法に散見したれ、之を拾聚して一聯の珠玉とし聖靈の氣を享けたる人の心に、眞の景慕を發揮せしむるの功は沒す可からず。教會の諸父之を稱して、福音の梗概と呼べるも、亦宜なり。古代の教に定めたる諸の禱辭と比するに、現實の慾願を却けて、精神の拯を求め、我見を擲て、仇敵を愛せむとする旨趣に於て、遙に秀でたりとす。イエスまた此時一條の譬喩を下して神父の慈悲を說きぬ。曰く、或人夜半に友の門を叩て、わが知己旅より歸り來りしも、之に供ふ可き食なし。願くは三の麵包を借せといはむに、我を煩はす勿れ。門既に閉されぬ。われ兒等と床に在りて起るに懶しと答ふる人あらむや。必ず日常の友誼を思ひて、戶を開き食を與ふるならむ。又思ふ汝等のうち父たる者、誰か其子の麵包を求むる時、

石を予へむや。魚を求めむに蛇を予へむや。卵を求むるに蠍を予へむや。汝等心惡しき者ながら、善き賜を兒等に予ふるを知る。まして天に在す汝等の父は求むる者に聖靈を給はざらむやと。

猶太祭司の黨、この時イエスが諸の奇蹟を施すを見て、かれ惡魔ベルゼブルに籍て行ふなりといひけるに、これ會々イエスが義憤を激し、熱烈なる非難を誘ひ出しぬ。曰く禍なる哉、汝等パリサイの徒よ。會堂の高坐に心あがりし、市朝の問安を好む者よ、禍なるかな。それ汝等は隱れたる墓の如し。其上を行く人これを知らざるのみと。一教法師ありてこれ思はざるの侮辱かなといふに、イエス復語を續て曰く、汝等もまた禍なるかな。教法師よ。任へ難き荷を人に負せ、自らは指一だに按けず。禍なる哉、教法師よ。智識の鑰を奪りて、自らも入らず、且入らむとする者をも阻むるかと。

生平流俗の尊奉を得て、謗辭になれたる者が、斯の如き叱咤を被りていかでか默すべき。彼等パリサイと學士とは深く憤をなして恨を含み、多端の難問を試みて、イエスの語を捉へ、後日訴訟の辭柄を設けむとす。これより迫害愈々猛に、傳敎の程また逃竄の路となり、遠くツロ、シドンの都市に走り、又湖東ペリヤの谷に眠る。まことや、狐には穴あり、鳥には巢あり、ひとり人の子は枕する所なく、ゆきゝてヨルダンの源を發すといふパヂヤの泉に達し、カイザリヤ、ピリピの郊經、瀲灩たる湖水のほとり、使徒彼得が、君は基督なり、現ける神の子なりといふ衷言を享けて、基督敎の基礎を定め給ふ。斯の如きの信仰は人より學び得たるにあらで天父の默照を受けたるなれば、イエス乃ち之を祝して曰く、ヨナの子シモン、福なる哉と。彼得は希臘の語にて磐といふ義なれば、

イエス此に語を設けていふ、汝は彼得なり。我この磐の上に吾が敎會を建てむ。地獄の門も之に克ち得ざらむ。我汝に天國の鑰を與へむ。汝の地にて繫ぐ所、天にても亦繫がれ、地にて釋く所天にても釋かれむと。是時よりしてイエスは己れエルサレムに往き、長老と學士と司祭長等より、多くの苦を受くる後殺され、三日にして甦るべきを弟子たちに示し始めけるが、彼得はよのつねの人情を以て遮り留め、主よ、さる事あらざれ。この事汝に來らじと慰むるに、これ却て主の尤むる所となり訓を垂れ給はく、わが仇サタンよ、我を離れよ。汝は我を躓礙しむるものなり。汝は神の事を味はず、惟人の事をのみ考ふと。顧て諸徒に敎ふらく、我に從はむと欲ふ者は、己を捐てゝ其十字架を負ひ來れ。生命を保全うせむとする者は、之を失ひ、我が爲に生命を失ふ者は却て之を得べ

し人もし全世界を得ることも、其靈魂を損せば何の益あらむやと此後六日、選徒雅各、約翰、彼得の三人を率ゐてヘルモンの高嶺に携へゆき、彼等の前にて、容貌變り、其面日の如く輝き、其衣雪の如く白くなれるを示したりといふ。

秋になりぬ。構廬の節近くまゝに、猶太の民は年毎の習として、聖京のまうでに賑はしく、巡禮の波たゆるひまなし。この祭は、昔、以色列の民が、荒野を過ぎりたる紀念にて、チスリ七月十五日より廿一日まで、七日の間、エボバの筵を守るものなり。初の日に安息をなし、八日めにも亦安息あり。繁く生ひたる橄欖のみづえ、棕櫚、松長春樹の葉を葺きたる廬に住ひて、人々ルラブといふ棕櫚、水楊の枝、また桃佛子柑の果を携へありき、聖殿の門には廿一聲の喇叭日毎に響き、七十頭の牛犧牲にせらるゝと共に、律法の奉讀あ

り。イエスこの時急に聖京に現はれ、殿に上りて、其神より遣はされたる使命を明にし、兼ねて祭司等が己を殺さむとするを明言す。節筵の末の大なる日、立て呼ぶらく人もし渴かば我に來て飲め。我を信ずる者は經に錄せる如く、其はらより活ける水、川のやうに流れ出でむと。此時民は彼を預言者といひ、基督といひ、又あらずといひて別れ爭ふ。祭司等益憚を爲して、イエスを執らへ、刑に下さむとすれば、議會の一員ニコデモの諫により、又下吏の敢て手を下さゞりしが故に、難なくして已みぬ。

味爽橄欖山を下りて、また聖殿に入り、坐して群民に敎ふるや、學士パリサイの徒は、奸姪の時執らはれたる婦を曳來て、イエスの前に置きていへらく、師よ、かくの如き者は、石にて擊殺すべしと、摩西は律法に命じ置きたれど汝如何に言ふやと。蓋し彼等はイ

エスが教法の秘訣は愛憐、慈悲の行に起因し、壓せられたるを起し、賤められたるを愛するにあるを察知す。故にイエスもこの婦に罪無しといはむには、律法を破り、羅馬の法制に戻れりとの辭柄を設けむこし、もし又罪ありといはむか、以て群民の歸依敬愛を奪ひ去り得むと思へり。イエスこの時、何の語なく身を屈め、指にて地にものかけり。これ疑もなく沙の上の文字消ゆるが如く、悔改の罪は忘じ果てらるべしといふ意なるを、冷刻なる學士等は知らざるまねしてなほ切りに詰りこふにイエス起て答ふらく、汝等のうちにて、罪なき者、まづこれを石にて擊つべしこ。また俯してものかき給へば、彼等こゝに良心の責たへがたく、老少ともに恥を帶びて一人〳〵に出行きぬ。あとにたゞ婦のみは髮亂し顏うつむけて止りたるを顧みて徐に戒め給ふ。我も汝の罪

を定めず、往て再び犯す勿れ。

暫くしてイエス再びガラリヤに歸りしが、危難の益々近けるを知り、七十人の教徒を派遣して、南方最後の旅に備へしむ。秋既にたけて、風冷かなるに、エムガニムの客舍に宿りを辭まれて、道進みがたく、癩者、聾者の數多くを癒しつゝ、秀妙の譬喩を敎へつゝ漸くベタニヤの家に至りぬ。都近き山里の懷にありて、マルタ、マリヤ、及び其はらからラザロの住める所、家饒にうから親みて歡待の道にいそしみ、特にマルタは供給のこと多くして、心入亂ければ、イエスに近よりて曰く、主よ、我妹われ一人を勞して何ども意はざるか。彼に我を助けよと命じ給へ。蓋し多感にして信多きマリヤが、イエスの膝下に坐して、其秀容を仰ぎ、いひしらぬ慈光に浴しゐたるを咎めたるならむ。イエス徐に慰めたまはく、マ

ルタ、マルタ、汝は多くの事にわづらひて。心勞ひせり。されど無て叶ふまじきものは一なるを思へ。マリヤは既に善き道を選びぬと。心の休を得て命に慰する者は、現世の細事に關づらひて、勢利の巷に奔馳する人にあらず。涙の谷にゐて悅びの生を送らむとするものは、イエスが此喩にきくべからざるなり。彼はすぐれたる透察を以て、人間の德をかき理を知らざるは、世事のわづらひ、眼前の憂慮に心奪はるゝが故なるを知れり。凡俗の煩累を脫して、人生の悲愁に堪へむと欲する者、基督の徒なると否とに拘はらず、無くて叶ふまじき人生の一大事を思へ。

イエスはじめナザレを棄てゝ、湖上カペナウンのシモンが家に宿り、今はこの美しきベタニヤの山莊に終の日を送りしと見ゆ。冬はや近きて、修殿の節來りぬ。ナスレウの月廿五日の祝にして、

ここしは臘月廿日に當りけむ。アンナオクス、エピファネスが聖殿を瀆がしたる六年の後、紀元前百六十四年、ユダ、マカベウスの制定せし祭にして、この日全都燈をかゝげ、油を燃して熱鬧いはむかたなし。イエスは朝まだきに、マルタの莊を出でゝ、橄欖の山越に多くの巡禮と合し、やがて聖殿ソロモンの廊に上ぼりて、燦たる昔日の戰利を眼にし、いにしへ今の感慨いと深きに、眸を轉して、東の方ケドロンの谷を眺むれば、幾代の民が殺しゝ預言者の墳墓白く列なれるを見る。此時猶太の人、多くかれを圍みて責問ひぬ。我等をいつまでか疑はするや。汝もし基督にして、以色列を拯ふべきメシヤならば、明に我等に告よ。ソロモンの榮華地のはてに及びたる往昔の榮を想はざるか。我等何れの日にか、羅馬の羈絆を脫がれて、萬邦の上に立つべきと、眞の救世主は、地上の權

威を恢復する者にあらで、天下の罪過を贖ふが爲なるを知らざる彼等は、政權國威の振張を求めて已まず。イエスが三年の傳敎終に頑冥の耳に達せざりければ、此時我と父とは一なりといふイエスの新聲に愕きて、激動少からず。神位を覬覦し律法を蔑みするものとして、將にイエスを石にて擊たむとせしが、また其威容に畏れて手を下す能はざりき。

イエス是に於てヨルタンの東岸、さきに洗者が敎を宣べしペレヤの地方に免れ、使徒を訓へ、慈行を垂れ、又律法の新釋を與ふ。パサイの徒來て試み問ひけらく、人其妻を出すは可きかと。當時婚配の倫常漸く弛み、異邦の俗またこゝに其廢頽を極めたれば、猶太の碩學中にも、シャムマイ、ヒレルの二派相岐れて前者は離緣の妄にすべからざるを敎へ、後者は婚配の解き易きを說きぬ。イ

エス答て曰く、摩西はそも何と命ぜしやと。彼等曰く離緣狀を書き與へて出すを許るせりと。イエス乃ち律法の精神に據り、此疑義を人情の秘奧に訴へて曰く、摩西は汝等の心つれなきにより て、かく命じたるのみ。されど開闢の初、神、人を男女に造り給へり。この故に人は父母を離れ、其妻に合て一體となる。これ既に二にあらず、一なり。されば神の耦はせ給へるもの、人これを離すべからず。基督の敎徒が婚配の神聖なるに安じて、操行を持するは、イエスが此溫情ある斷言に基けばなり。これら傳敎の日ペレヤの民多く集り來て、清新の道を喜び、女人も亦孩提を懷にして聚まりたるを、使徒は敎祖の聖を害なふものとして叱責したりければ、イエス却て怒を含みて曰く、孩提をわれに來らせよ。彼等を禁むる勿れ。誠にわれ汝等に告げむ、孩提の如くならざれば、神の

國に入らじと。彼等が頭を撫して祝福を加へぬ。

かくて感歎にくれたる群集を從へ、なほ路を進むるに、美服のわかうど走來て跪き問ひぬ。善き師よ。我限りなき生命を嗣ぐ爲に何を行すべきかと。彼位貴く、財豐に、德薄きにしもあらず。たゞ眞摯なる人生の疑義に思ひ至らで、徒らによのつねの習に從ひたりしが、此日にはかに生死の大事を覺悟して、イエスが傳敎を聞かむとせしならむ。イエス乃ち敎て、律法に述べたる誡は汝の知る所なり。姦淫する勿れ、殺す勿れ、盜む勿れ、妄の證を立つる勿れ、騙く勿れ、汝の父母を敬へといふに、師よこれ皆わが幼なきより守れる所なりと答ふ。イエス彼を見愛しみて徐に語り給ふ。曰く汝なほ一を虧けり。ゆきて其所有を賣り、貧者に施せ。さらば天に於て財あらむ。又歸來て十字架を操てわれに從へと。かれ此語に

因て哀み憂て去りぬ。基督の敎ふるところ理想高く、標示はるかにして到底人間の達すべきに非らざる如きも、秀絕なる此理想に向て、精進せむとする景慕翹望の性は、永く人類の醇化を促して已まさるものならむ。使徒今この敎を聽て皆駭きぬ。イエスなほ語を續て曰く、財を恃む者の、神の國に入るは、如何に難い哉、駱駝が針の孔を通るは、富める者の神の國に入るよりも易しと。彼等愈よ異みて互にいへらく、さらば誰か救はるゝを得むと。イエス彼等を注視ていひ給はく、人には能はざれど、神には然らず。神は能はざるなしと。秀絕企圖すべからざる理想は、神父の恩寵を以て、玆に調和せられたるなり。

このときペタニヤなるマルタ、マリヤの家より使來て、はらからラザロ病篤しときこゆ。イエス之を聞て曰く、こは死する病にあ

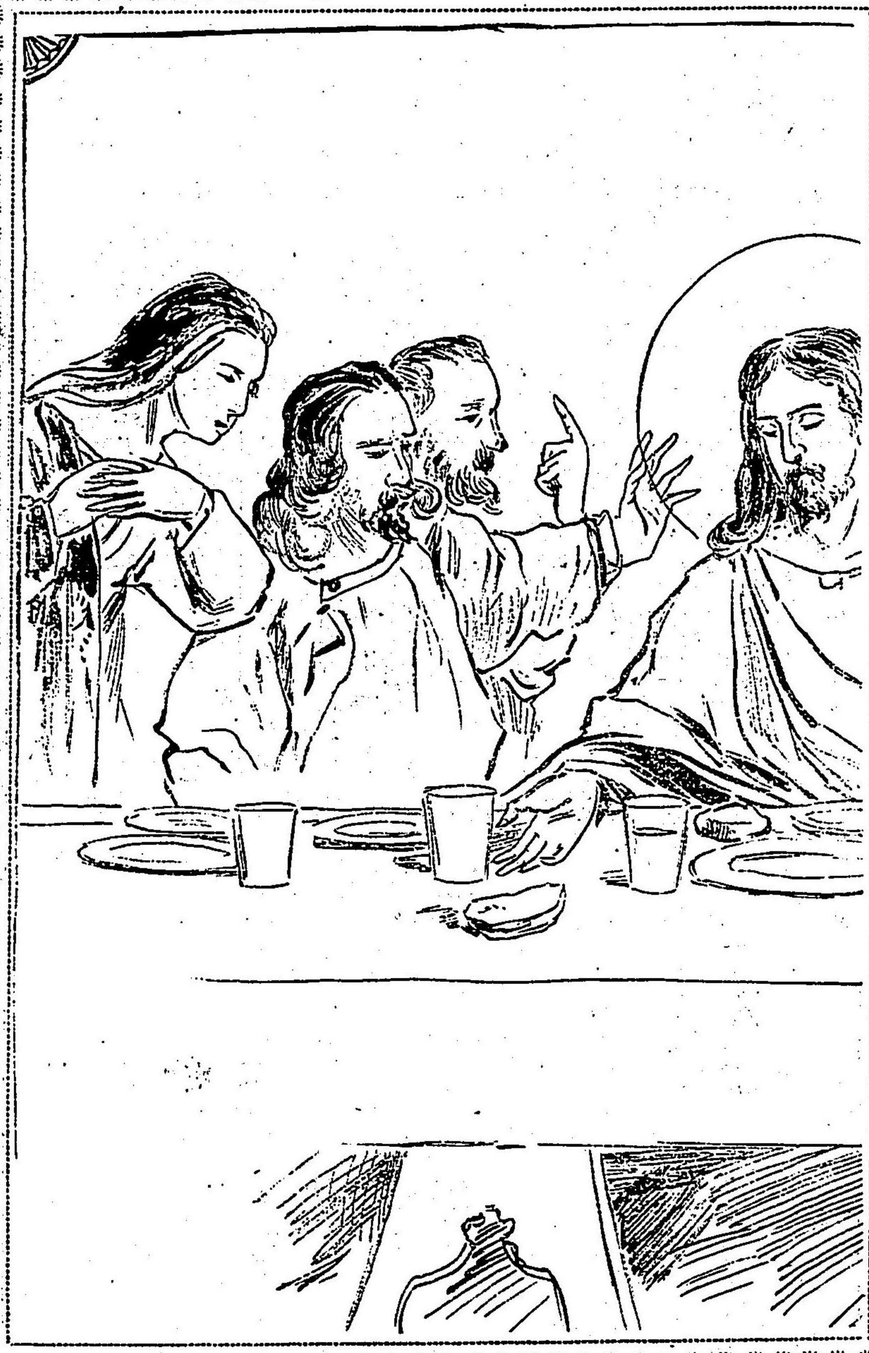
らず。神の子をして榮を得せしめむもの也と。なほ淹まること二日、使徒に向ていふ。われらが友ラザロ寢たり。いざゆかむと既にしてベタニヤの閭巷に至れば、ラザロ葬られてはや四日なるを知りぬ。聖京を去る僅廿七町の距離なれば、生前の故舊相會して、殘れる姉妹を慰むるに、マルタは心輕しき例の性なれば、客を迎へ哀みを語るに暇なく、マリヤは室に居て想に沈みぬ。イエス明に示して曰く、我は甦生なり、生命なり。我を信ずる者は死すも生きむと。乃ちラザロの墳にゆきて、石を除り大聲に呼び給はく、ラザロよ出來れと。死者布にて手足を卷かれ、面は手布に裹まれて動き來りぬ。これイエスが奇蹟の最も著るしきものなれど、不信の徒輩が傍觀する所に行はれしかば、まのあたりの不思議に疑の雲を拂ひ、惑を去て歸依するもの頗る多かりければ、パリサ

イの徒祭司の長等はこれに由て國安の亂れむことを大に恐れ、議員を呼集て曰けるは、われら如何にか處すべき。この人多くの奇蹟を行ふ。もし棄置かば、民皆これを信ぜむとす。これ羅馬人の干渉を促がすものならずやと。今年サンヘドリンの首なりける祭司長カヤパこの時聲を擧げていふ、民の福の爲には一人の命を惜まじ。イエス殺されて擧國ほろびざるこそ我等の益なれと。逮捕の議是に於てかたく決しぬ。イエスこれより顯はに猶太を行かず、去て荒野に近きエフライムの地に走り匿れたり。春ニサンの月既に巡り來て逾越の節に近けば、祭に列らむあらましにて大衆の巡禮、ヨルダンの谷に下り身滌せむとするに、皆イエスをエフライムの丘のほとりに見て、相互に語らく、如何に意ふや。彼ついに京まうでせざるべきかと。祭司既に令を發して其所在

を探らせければなり。イエス乃ち十二の使徒を携へて、メシヤの眞諦を明示すらく、見よ、われらエルサレムに上ぼるや人の子は祭司の長と學士等との手に賣られ、彼等これを死に定めむ。而して彼を異邦人に交たし、凌辱らしめ鞭たしめ且十字架に釘けしめむ。斯て彼は三日に甦へらむと。今こそ隱處を棄つる時は來りけれ。この小邑を後にし、聖京に向ふに、高潔の靈尙眼前に迫れる死の苦を思はざるにあらず、暗き峽間の小徑を歩み、頭たれ、眼沈み、ひとり先ちて悲哀の盃を飲み給ふ。三年の昔、荒野に食を斷ち惡魔の誘惑を却けし時よりも、なほにがき煩悶に苦みたるならむ。漸くにしてエリコの村郊に近き、香華樂園の姿忍ばする其風景の清光を賞して終に肉の苦に打克ちたり。茲に路傍の瞽者を癒し、又忍辱謙讓の德を敎へて、使徒が戒さなし、晝、收稅吏ザアカイの家に食して、両銀の譬喩を。べ終にベタニヤの例の家に達しぬ。實にこれ羅馬建都七百八十年、ニサンの月八日、今曆を以ていはゞ、紀元三十年、三月晦日金曜の夕暮なりき。

四、受難及び復活

明くるニサンの九日は、逾越節に先つ六日、大安息日といふ。この日事無くて暮れ、夜に入りて例の山莊に饗宴うけ給ひぬ。情濃に信深きマリヤは、この夕イエスの傍に侍りて、其秀容をまもる。終の既に近きし兆見えて、法音つねよりも懷かしく、萬感交迫り來て終に堪うる能はず。則ち起てナルドの香油、價たかきを携來て、蠟石の盃を破り、イエスが頭と足とに注て、己が長髮の豊けきをもて拭ひぬ。名香のにほひ室に滿ちて、夢の如くうるはしき



にマリヤはたこしへなき樂をうけたり。まことや、昔の帝王が豪奢一世を傾けむとせし時だに、かゝる敬愛のしるしは珍らかなりしを、イエスに從ひしガリラヤの漁夫が驚きに暮れたるも故ある哉。使徒のうちイスカリオテのユダは、性もと刻薄にして財を愛し、おのがイエスに見たるメシヤの賴少くなになりたるより、漸く信を失ひ來りしが、今此常を超えたる行に驚き、鄙吝の性默するに忍びず、則ちマリヤを尤めていふ、何ぞこの香油を、銀三百に售て、貧者に施さゞるやと。イエス其僞善を見極めたれど、未だまのあたり叱し給はず。徐に戒めて曰く、妨ぐる勿れ。いかなれば、この婦を惱ますや。貧者は常に在れど、我は常に汝等と偕に居らず。これ蓋し、あらかじめ、我が葬の香油を沃ぎしなりと。萬古に醜を流したるユダが惡心は、全く此機に熟したりけむ、少許にし

て聖京なる祭司長の許に走り、いまの四十金にみたぬ銀三十を得て、イエスを付さむと約しぬ。

後園の棕櫚、青く聳えたる朝の空に、ベタニヤを出て、橄欖山を上ぼれば、巡禮の波けふも絶ゆるひまなく、湖畔の傳敎に、イエスの新聲を喜びし者、また多く雜れり。ベツパゲの村を過ぐる比、驢馬の子を得て、之に衣を置き、跨てなほ聖京へ進むに、忽ち路屈し、山開けて、エルサレムの殿宇一眸のうちに聚る。金堂白堊、春三月の空にかゞやき、百代の歷史こゝもとに浮び來るが如く、聖殿の塔は天を指し、ケドロンの谷、綠を布き、當時世界の壯觀として、東邦の榮なりし此光景を觀て、イエスが心は如何なりけむ。路上の大衆この時新衣を投て、イエスが路に布き、あるは橄欖、無花果樹、胡桃の若枝を伐て、其前に散らしつゝ、叫びけるは、ホザナ、ホザナ、ダ

ビデの子、福なる哉、主の名に託りて來る者よ。いと高きに、ホザナと使徒相賀して群聚と和するに、イエス既にして城門に近きて涙を流しぬ。悲をなして曰く噫、今この汝の日に於て、もし汝の平和に關れる事を知らば、福なるにと。聖京の榮華、幾くもなくして滅び猶太の社稷やがて傾かむを憐みて、憂國の情腸を斷つ思あり涙はふり落ちて言ふ能はず、暫らくにして、語をつぎて曰く、されど、今汝の眼には隱れたり。汝の敵は壘を築きて、四方より圍み、汝と其兒女を滅して石の上に石殘さゞる日は來らむと。この時ケドロンの綠陰に茅結びて宿かれる多くの巡禮も、路上の歡聲を耳にして相呼應し、棕櫚の葉を折りて、まき布きつゝ、シユシヤンの大城戸に至て漸く散ぜり。この日イエス聖殿に上て、再び商賈を追ひ、祈禱の殿を瀆したるを叱するの後、瞽者跛者數多を癒して、群民の驚歎する所となり、殿内の兒童等が讃美の歌を享けぬ。大衆のうち希臘人數名來て見えむとを請ふ。終に其何の故なるを知る能はざれど、まのあたりの奇蹟と清新の敎とに感じて、信を得たるものならむ。昔降生の夜、カルデアの博士來り、けふ受難の週、希臘人の訪ふあり。東西の邦人ゆくりなく相對して、この君の德に謳歌したるものか。この夜ベタニヤの方に退て都郊の樹陰に枕し給へり。

月曜の朝、はやく起出で、また聖殿の道を行くに路のほとり、遙に葉ある無花果樹を見て、こゝに朝餉の料を得むと思ひぬ。ことし生の果のなる候はまた來らねど、秋の名殘の熟したるは、永く枝に殘りて人の賞美する所なり。されど近寄りて、葉陰をすかせば、たゞ青綠の色美しく見えて、何の果もなし。則ち之に對て、今より

のち、永久に果を結ぶことを得ざれといへば、其樹たちどころに枯れ果てぬ。これ僞善の厭ふべく、外觀のあざむき易きを敎ふるなり。使徒怪みて問ひけるは、無花果の枯るゝ何ぞかく速きやと。答へて曰く、もし信仰ありて、疑はずば、ひとりこの樹に於けるのみかは。この山に命じて海に入れよといふとも、亦成らむ。祈らば求ふ所、盡く得可しと。

この時聖殿の階の上には、祭司の長、民の長老、學士、ラビ、議會の員等列を爲して、イエスに訊ぬらく、何の權威によりて汝これらの敎を爲すやと。ナザレの邊陬に生れ、律法の敎に精しからず、妄に新法を述べて、民を惑はすものなりとして、僭越の罪をいひかく。イエス答て曰く、我も亦一言、汝等に問はん。ヨハネが洗禮は何處よりぞ。天よりか、人よりかと。祭司の徒顧みて、互に論ずらく、若し

天よりぞと云はゝ、何故に之を信ぜざるかと問はれむ。若し人よりなりと答ふれば、民の恨を買はむと。遂に知らずと答ふ。イエス少しく笑を帶びていひ給はく、我も亦何の權威をもて行ふか、汝等に語らしと。律法に通じ、敎義の師なりと誇れる祭官等は、此辱めに頭を俯れて退きぬ。

この日、あまたの譬喩を設けて、神人の道を說けり。其一に曰く、或る人葡萄園を植ゑ、樊籬を環らし、酒酢を掘り、塔を建て農夫等に貸して、遠き國へ旅だちぬ。期來りければ、此園の果を收めむとて、僕を農夫の許に遣せしに、彼等これを執らへ、首に傷けて逐歸せり。また他の僕を送りしに、これ亦毆れて徒に戻りぬ。かくすること數度なりければ、二人の愛子を遣はして、謂へらく吾子をこそは敬ふらめと。農夫等其嗣子なるを思ひ、これをなくなさば、田園

おのれらが有ならむごて、終にこれをさへ夠へて殺せり。しからば葡萄園の主如何に處すべきか。必らずや來て、農夫を滅ぼし、他の者どもに田園を貸與へむ。經にいはずや工匠の棄つる石は、これ即ち隅の首石となれり。これ主の成し給へる事にして、我等の眼には奇やしと。

また秀れたる譬喩あり。曰く天國は、ある王其子の爲に婚筵を設くるが如し。招きおける客を召ばしめむとて、僕等を送りしかど、彼等來り列なるを肯ぜず。復ほかの僕等を遣さむとて、命ずらく、招きたる人々に語れ。視よ、吾が宴既に備れり。牛と肥たる畜をも、宰りて盡くそろひたれば、とくほがひに來れかしと。されど彼等顧みずして去りぬ。其一人は、田にゆき、一人は商業に出て、其餘は、却て使者を辱しめて殺せり。王これを聞て太たく憤り、軍勢を遣

はして、これら兇惡を亡ぼし、又其邑を燒きたり。時に王新に命じていふ、筵既に備れども、招きおける者どもは、客とするに堪へず。されば衢にゆきて、凡そ遇ふほどの者を請き來れと。使こゝに途にして婚筵の客充滿す。王乃ち客を觀むとて、入來り、そこに一人婚禮の服つけざる者あるを見て、尋ぬらく、友よ、いかなれば、禮を虧きて來れると。彼默していはず。王終に役丁に命じて、彼の手足を縛りて、外の幽暗になげいだし、其處にて哭み切齒せしめたり。それ召るゝは多く、選はるゝは少しと。ファイドンに傳へたるソオクラテエスが語にも、チュルソスの笻を持つ者は多けれど、悟道の人は少しといへるに對して、哲人の敎いつも變らぬを見るなり。祭司の徒、この日イエスがおのれらに加へたる非難耻辱を思ひ、

衷心の煩いと堪へ難く、憤も恨も燃ゆる如くなりけれど、常に民の情を憚りて罰する能はず、パリザイの徒是に於て終に日常の敵なるヘロデ黨とも相結び、羅馬人が武權を假りても、イエスを殺さむと謀りぬ。

火曜の朝、イエス最後の傳敎を聖殿の廊に述べむとして、階の上に立てば、ヘロデ黨の者唆かされて迫り來りぬ。心を裏み、禮を卑うして、尋ぬらく、師よ、汝の誠實なるは、我等よく知れり。貌に由て人を取らざる我等は、眞實を以て神の道を敎へ、又誰をも憚らざる師の勇を嘉せり。されば、汝如何に思ふや、貢をカイザルに納むるは、可きか否かと。可しと答へむか、これヘロデ黨の持說と符合して、羅馬の政權を認めたる斷案なれど、民衆の感情を害し、これまでの輿望を擲たざるべからず。惡ろしと答へむか、これ明に皇帝に對する反逆にして、羅馬政吏の干涉を被らざるべからず。虛文僞善の徒、イエスを憎むの餘り、この兩角論法を以て、其落命を謀りしなり。イエス素より彼等が諛辭を信ぜず、こくに其惡計を看破したるからに、勵聲していふ。僞善者よ、何ぞ我を試むると。喝し訖てまた語葉を和げて、貢の貨幣を我に見せよと求むるに、彼等デナリ一個を呈せしかば、問て曰く、此像と銘とは、誰のなるかと。カイザルのなりと答ふ。こゝに斷論して曰く、さらばカイザルの物はカイザルに歸し、神の物は神に歸せと。論鋒の奇警にして、常に敵者の意表に外れ、而も恒久の眞理を述べて謬らざるは、イエスが當代に傑出せし所にして、聽者の耳を驚し口を噤せしめたるも宜なる哉。

靈魂の不死を信ぜず、來世なしといへるサドカイの徒來て、矯激

の論を試みし時も、又は律法の精神を傳へたりこパリザイの人誇れる時も、イエスは常に敵の刃を以て、抗議をくぢき、終に語塞からしめたり。群聚の驚歎こゝに於て益々高く、學士の間、また耳を傾くる者生じぬ。一人の教法師群を脫し問を試みて曰く、諸の誡のうち、何れか首なるこ、答て曰く、以色列よ、聽け主なる汝の神は唯一の神なり、心を盡し、靈を盡し、意を盡し、力を盡して、主なる汝の神を愛すべし。これ第一の誡なり。第二も亦之に同じ。汝の近倫者を己の如く愛すべし。これらをおきて大なる誡は他にあらじこ學士服していふ、善いかな、師よ、この二を守る事は、げに燔祭こ犧牲こよりも大なり。イエス其智く答へしを見て、慈悲の心動き、慰めて曰く、汝は神の國に遠からずこ。此後敢て難問を出す者無かりき。

祭司教法師のこもから、かくて退きたれば、廻廊のほこりより大群衆に諭しけらく、長き袍にて歩き、衢にて禮せらるゝを喜び、會堂宴席の高坐を好み、長き祈禱に託けて、寡婦の家を呑むかの學士等を愼しめこ。義憤慷慨の辭、愈々調を高うし、虛文耨禮の厭ふべきを叱して餘さず。終に喝して曰く、嗟禍なるかな、學士パリザイの徒よ。杯盤の外を淨むれど、汝等の內には貪慾こ不潔こ充ちたり。嗟汝等は禍なる哉、白く塗りたる塋にさも似たり。外部は美しく見ゆれど、內は骸骨こ諸の汚穢にて充てり。吁嗟蛇よ、蝮の裔よ。汝等いかで、ゲヘンナの刑罰を遁れむや。視よ我汝等に豫言者智者學者を遣さむに、或は殺し、或は十字架に釘け、或は鞭もて邑より邑へ追迫めむ。われ誠に汝等に告ぐ。これらの事皆この民族の上に報ひ來らむこ。眼を轉ずれば、聖殿の莊麗いまさらのやう

に眩ゆく、金堂、銀扉、四廻廊、四十一階の石たゝみ、夕榮に映じて、亡滅の日近しとも覺えず。悲愁こゝに堪へ難けれど、罪障の報また轉ずべきにあらず。呼はりて曰く、噫エルサレムよ、エルサレムよ、豫言者を殺し、汝へ遣はされたるを、石にて擊殺す者よ、母鷄の其雞を翼に集むる如く、われ汝の赤子を集めむとせしこと幾次ぞや。されど汝等は好まざりき。視よ、汝等の家は墟址となりて遺されむ。我汝等に告く、主の名に託りて來る者祝せられ給へと、汝等の言ふまで、今より汝等は我を見ざるべしと。けさよりの激情に、心疲れて、聖殿を下らむとする時、女人堂の廊を過ぎて、富者が捐賽を見給ひぬ。喇叭の形して、口に經文彫りたる納箱十三に、諸人項禮して金銀を投ずれど、修飾の爲め、あるは迷誤の爲にするもの多く、眞の慈善を解したるにあらず。會々一人の嫠婦、レプタ二個、

即ち我が五厘に足らぬを投げ入れたるを見て、イエスの溫情は泉の如くわき出たり。使徒を顧みて、言たまはく、われ誠に汝等に告ぐ。この貧しき寡婦は、すべての者よりも多く入れたり。何となれば彼等は剩あるより納め、これは足はぬを割きければぞと。貧者が一燈の例、ながく慈善の精髓と仰がるゝが如く、この寡婦の德、亦イエスを悅ばして、心すがゝしく神の宮を降りにけり。

十門の一を出でゝ、ベタニヤの村に進む時、使徒の一人は、顧て輪奐の美を賞し、波浪相追へるが如き朱白の高塔を指しつゝ、如何に巨怪しき石ぞ。如何に盛壯なる結構ぞといふに、汝等この大なる殿宇を悉く睹るか。一の石も把れずして、石の上に遺らじと渝し給ひぬ。橄欖山の高みに達せし時、高弟彼得、雅各、約翰等聲を潛めて、何れの日か此等の事あるやと問ふに、イエスは莊嚴の辭令

を以て、來る可き萬民の運命を顔言したまへり。愼みて人に惑はさるゝ勿れ。多くの人わが名を冒し來り、我は基督なりと號して、世を惑はす可ければなり。戰亂を聞くとも、懼るゝ勿れ。此等のこと先にあるは已むを得さるとなり。されど終は未だ至らず。民は民を攻め、國は國を攻め、各處に大なる地震、饑饉、疫病、おこり又恐るべき事と大なる休徵天より現はれむ。その先に人々汝等を執らへ、苦しめ、會堂、および獄に賣たし、わが名の爲に、王侯の前に曳き往くべし。されど此事に遭ふはわが證となるものぞと。新月の微光、林を洩るゝころ、ベタニヤに退きて、靜けき例の家にかへり、翌水曜はひねもす、籠りゐて聖京に出でず。

木曜の朝けふは除酵節に當れば、弟子たち、イエスに詣りて何處に逾越の食を備へしめむと問ひけるに、言たまはく、城下に入ら

ば、水瓶挈てる人に遇ふべし。其入る家に隨ひゆきて、主人に言へ、師いふ、吾が期近けり。我弟子と偕に汝の許に逾越を行はむと。さすれば備へたる樓房を貸すべしと。かくて其如くしければ、夕ぐれに筵を設くるを得て、イエスは使徒等と共に食に就きぬ。

白壁の一室、其中央に低き卓を具へ、裕に三人を載すべき椅子を三面に据て、イエスは十二の使徒と食に向ひけるに、彼等密に席を爭ひて、不快の念自ら面に顯はれたるより、イエスはまた謙讓の德の尊ふべきを敎へむと、袍を脫し、手巾を採て、腰に束ひ、盤に水を盛りて、自ら使徒等の足を濯ふの後、束ひたる手巾もて拭ひ給ひぬ。遂にシモン、ペテロに及べる時、彼いたく畏みて、主よ、わが足を濯ひ給ふやといひけるに、イエス靜に答ふらく、わが爲すこと汝は今知らず。後に悟りてむ。もしわれ濯はずむば、われと干渉

なし。われは師また主なるに、なほ汝等の足を濯ふは、汝等もまた互にかく行はむことを求めてなりと。また語を續て曰く、誠に、實に汝等に告ぐ。汝等のうち我を賣たす者ありと、使徒互に見合せて疑ふに、最愛の使徒約翰主の左に横て、其胸に倚りつゝありければ、彼得顏を以て合圖し、其誰を指せるかを、問はしめたれば、約翰ひそかに主よ誰ぞと囁きぬ。イエス答へけるは、われ一撮の食に物を濡けて予ふる人それなりとて、イスカリオテのユダに予へつゝ、爲さむとする事は速に爲せと。ユダ乃ちすべり出でぬ。約翰、彼得のほかはたれありて、彼を怪むものなく、唯主の命を受けて外出せりと思ひければ、何の妨もなくて、節筵は酣になりぬ。時既に夜をりき。

イエス乃ち麵包を取り、祝して之を擘きつゝ、使徒に頒ちて曰く、

取て食へ。これわが肉軀なりと。また爵を捧げ、彼等に與へて曰く、汝等みなこれより飲め。こは罪を赦るすとて、衆の爲に流されむ新約のわが血なりと。ユダ既に去て、晩餐の興漸く起り、親愛の氣この小樓に靄然たるにより、イエスが心またたゞしへなき靜穩を得て、最後の敎訓を垂れ給ふ。悲喜交々相雜り、神秘のけはひ珠玉を鏤めたる如き此說話は、ひとり第四福音者の傳ふる所にして、訣を惜むこと切に、志を傳ふることつぱらに、落日暮雲を染むるの觀あり。今ぞ人の子榮をうくる。神また彼に因て榮ありと。現世の大業茲に成て心神の健やかなるを覺ゆ。既にして牧者なき綿羊の助なきを憐みて曰く、をさな子よ、我しばし汝等と偕にあれど、わがゆかむ所には來る能はじ。われたゞ新しき誡を汝等に予ふ。即ち汝等相愛すべしこの是なりと。かくてピリポに敎へ、トマ

スを諭し、基督教の眞諦、愛の道を設くこゝいと精なりける時、彼得は例の熱意の性にて、主よわれは、何故になんぢに從ふ能はざるや。我は命を捐つとも厭はじと迫りたるに、汝命をわれに捐つるや。まことに汝に告く、鷄鳴かざる前、汝三たびわれを識らずと言はむと答へ給ふ。そもの方を見出せば、夕月葡萄樹の陰を掠めて、秋の夜のあはれには多く立優れるに、再び譬喩をこゝに設けて、神父の慈愛を說き、實のなれる枝の敎を述べ給ひぬ。

筵こゝに終りて、イエス使徒等ここもに、大ハレルこいふ詩篇をうたひつゝ、庭におりたちて、歩をケドロンの谷に抂く。歌に曰く、死の繩われをまこひ、陰府のくるしみ、われに臨み、患難と憂苦とは來りぬ。時にわれ神の御名を呼びていふ、エホバよ、願くは靈魂をすくひ給へと。又曰くエホバはわが力、わが歌にして、わが救と

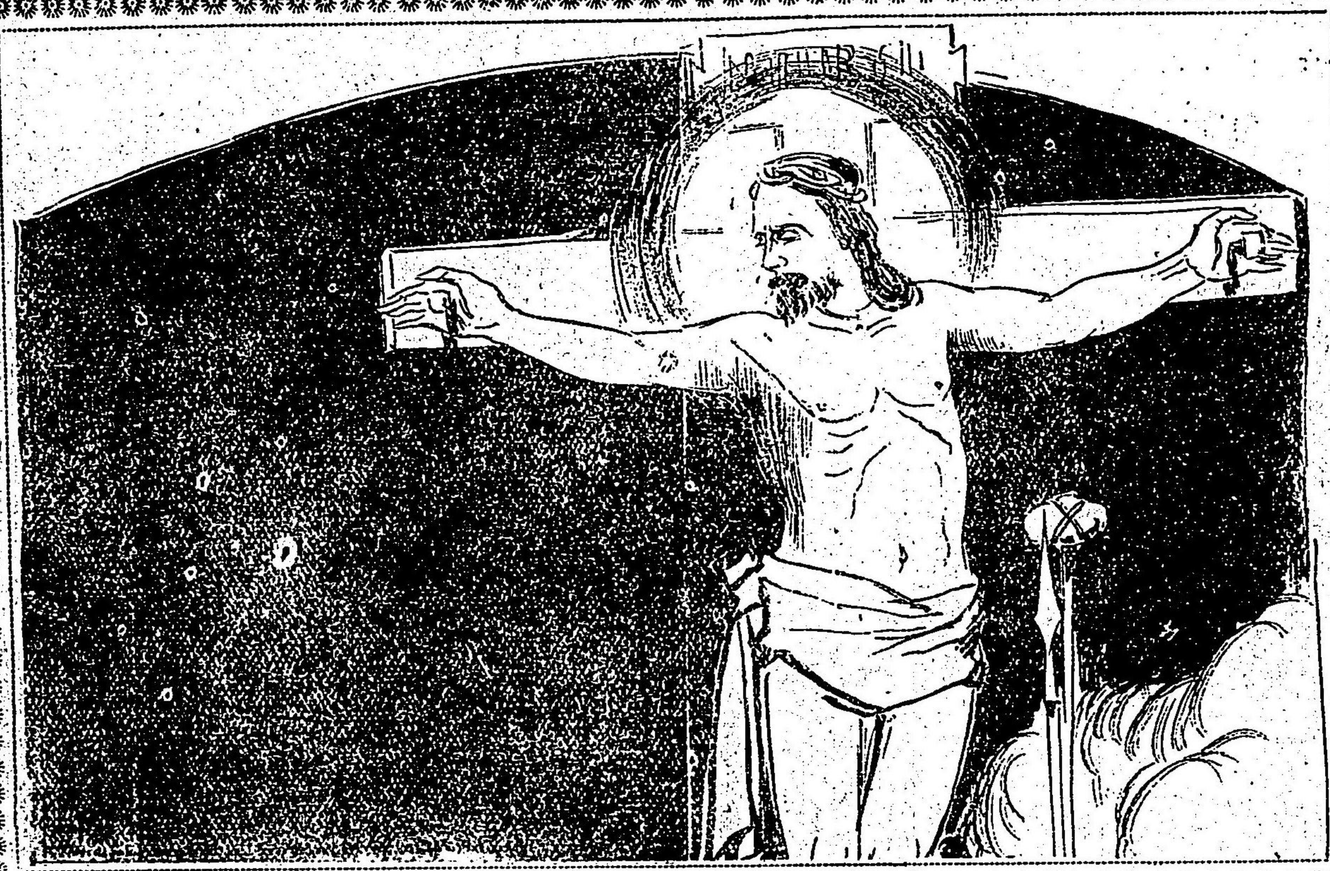
なり給へりと。橄欖の森陰ほの暗けれど、聖殿の透廊月に照りて、鳩の夢穩にゲツセマヲの苑には、夢路にてたどりつきぬ。イエス命じていふ、汝等こゝに居れ。われ彼處にゆきて祈らむと、たゞ三人の愛弟約翰彼得雅各のみを從へて、離れ進みしが、憂哀胸をふさぎて、苦悶いふばかりなく、遂に彼等ども離れて、石の投げらるるほど隔り、跪きて祈禱り給へり。この幽玄なる愁思は、せめて凡俗の推し量るべき限にあらず、まことにこれイエスが第二の誘惑にして、猛なる惡の力と爭ひたる時なり。東邦の夜の靜けさに、きれ〳〵ながら、苦悶の語葉きこゆ。アバ、わが父よ。もし聖旨に協はゞ、この爵をわれより離ち給へ。されども、わが意にあらず、聖旨のまゝに成し給へと。痛哭のあまり汗血の如く滴りぬ。言訖りて心神にはかに清く、終に業惡の誘に克ち給ひけるにや、歸り來り

て使徒等の眠りたるを起し、視よ。時近し。人の子罪人の手に賣られむ。起よ、彼來りぬといふ。

忽然として炬火、林間に洩れ、帶劍の武夫、祭司等に先ちて走せ來れり。ユダ傍より號を與へていふ、わが接吻するもの彼なりと。直にイエスの許に進みて、アエ、ラビと呼はりてくちづけしけるに、イエス徐に汝等たれを求むるや、ナザレのイエスとは我なりと いひ給ふけはひ、いと神々しくて、暫らくは手を下す能はざりき。

使徒の信、今にはかに衰て、恐怖の念抑へ難きに、たゞ彼得のみは劍を拔てはむかひつ、大司祭の僕を擊て其耳を削りけるに、イエス顧みて叱し給ふらく、汝の劍を收めよ。凡て劍とる者は劍に斃れむと。その耳に捫りてこれを癒し、最後の奇蹟に博愛を示して、縲られ給へば、十二天軍の愛子、偸盜の如く曳かれ給ひぬ。

時既に半夜を過ぎて、街頭隻影なく、十數の祭司と武夫とは、聖殿の方に歩を急ぎて、アンナスの前にイエスを連れ行きたれど、彼默して言はず。この亂雜なる法庭に訊さるゝを否みたれば、衆怒て其口を歐ち、種々の侮辱を加へたるの後、曉近くカヤパの邸に徙せり。こゝに多くの議員集り居て、伴の證多く求めたれど、皆効なく、終りに臨みてカヤパ色を作して問ひけるは、汝果して神子基督なるか。活ける神に誓はせて、いはしめむと。イエス遂に口を開て曰く、汝自らの言へるが如し。且われ汝に告ぐ。この後、人の子權能の右に坐し、天雲に乘りて來るを見むと。是に於てか、カヤパ大に震怒し、其袍を裂て、叫びけらく、今こそ瀆しの言を聞きけれ。このほかになんの證要らむやと。長老、議員相和して死に當れりと宣告し、面に唾し、頭を歐ち、凌辱の術を盡して足れりとせざり



耶穌釘死在十字架上

耶穌

しかど、悲しい哉生殺の法權この時、既に猶太人より奪れてあらず、イエスは終に、石たゞきの遺法に仆れずして、羅馬刑律の十字架に釘けせられ給ひけり。

この時使徒彼得は、群に紛ぎれて、祭司の前庭に入り、訊問の結果知らむとて、僮僕の輩とともに、爐火を擁してありけるが、一人の婢女近きて、われガリラヤの湖邊に彼イエスに從ひ居たる見きといひければ、恐れてわれ識らずと答ふ。彼こゝに於て衷心安からず、且は其方言の爲に見露されむを憚りて、中門を出でむとするに、他の婢また來て、これナザレのイエスと共にありし者なりと叫びければ、益々身上の難を恐れて、再び否むらく、われ實に識らずと。歩を廻らして復中庭に歸り、爐邊に踞して衆僕の睇視に安からぬ思しけるに、耳を削がれし僕の親戚も入り來て、われこ

の人のイエスと共に苑中にあるを見たりといへば、羞恥窘窮のあまり、詛ひつゝ誓ていふ、われ全く識らずと。辭未だ訖らざるに、鷄聲曉を告けて、彼得の胸をうち、宵の間の豫言ふと浮び出たれば、良心の責にはかに堪へ難く、衣を裹げて街頭に突出し、遠く内庭を望みて痛哭せり。

抑も踰越節は、猶太全州の祭筵にして、この時聖京の莊麗、其極を盡くし、民衆の熱意ひごろに倍するなれは、牧民の職に當る者が、最も周到なる警戒を加ふるの時なり。猶太の方伯ポンテオ、ピラトは、京城の繁榮を觀、又其危險に具へむ爲とて、北の方カイザリヤ、ピリピの都を出でゝ、エルサレムに來り、聖殿の西南、宏莊無比なりける宮殿に宿りぬ。金曜の朝、公廳に出でゝ其日の訟を聞かむとするに、ナロパイオンの谷に架したる長橋をわたり、サンヘ

ドリンの議員綠袍をひき、大司祭カヤパスこれを統べて、一人の俘虜を圍み來るを見る。春光はやく金殿をおほひて歡樂を悅べる羅馬人の心は、をりふしの美に醉へる時なるに、この解し難き猶太の民は、けふも宗教の爭をなして、祝祭の興を破れるかと、ピラトは既に不快の念を抱けり。踰越の筵を汚さむことを恐れて、祭司等は公廳の門を入らず、たゞ憎惡の情を顏に顯はれて、イエスを控へたるにピラト出て尋ぬらく、如何なる訟を以て、この人を曳き來るやと。祭司の徒既に明答を爲す能はず、たゞ彼もし惡を行せるに非らずむば、汝に解たさじこのみ答へぬ。ピラトこゝに一旦は、イエスを猶太人の手に歸し、律法に隨て審かしめむとせしが、生殺の權既に彼等に無きを思ひ、已むを得ずして、イエスを殿中に召し、諸人の訟ふる如く汝は猶太の王なるかと訊ねけ

るに、イエスは徐に清新の語を放てこの羅馬人を驚かしたり。曰く、我國はこの世の國に非らず。もし然らば、わが僕我を猶太人に賣たさゞらむが爲に、戰ひしならむ。我は王なり。眞理を証さむが爲に臨めりと。現實を重じ、理想を仰かざるこの羅馬人は、今此高遠なる夢幻の如き答を耳にして、迷蒙終に破れず、眞理とは何ぞと事もなげに怪みたるのみ。而もイエスが清癯の形を見て、其全く罪なきを知り、再び出で衆に語らく、我この人に罪あるを見ずと。祭司の徒こゝに其計畫の破れむを恐れ、聲を揚げて、ピラトの再番を迫り、この人は民を惑はして、カイザルに背かむとし、ガリラヤのほとりを騷しぬといひければ、ピラトはこれをガリラヤ分封の君ヘロデに送りておのれの煩累を免れむとせり。

をりふし、ヘロデもまた聖京に來りてアスモニヤ家の舊殿に在

りしかば、イエスを召して奇蹟をまのあたりに行はしめむこせしに此庸愚なる俗王の前に、イエスは何の辭も發せざりければ、終に怒を爲して、主を罵り、兵卒に命じて、わざと華美なる衣をきせ、再びピラトの庭に送り歸へしぬ。

彩ある蠟石の床の上に据たる高坐に居て、ピラトは再びイエスの無罪をことはり、羅馬法政の公平を保たむとしたれど、長老祭司固く執て動かず、煽動せられたる群民もまた荐りにイエスの死を求めて止まざれば、ピラト漸く倦み來りぬ。加ふるに騷亂の急に破れむことを恐れて終に宣言すらく、われこの訴を鞫けども、罪あるを見ず、ペロテもまたしか思ひて、其死に當るを知らざりき。されば、われ笞ちて之を釋さむ。この節筵に當り、囚人ひとり釋さむこと汝等の知りたる例ならずやと。其時バラバといふ者、

城下に一揆を起し、人を殺して、獄につながれ居たるにぞ、衆人齊く呼はりていふ、バラバをこそ釋るせかし。彼は殺してむ。十字架に釘けよ。十字架に釘けよと。呼聲法庭をふるひて、激昂愈々募り、如何ともすべからざるに至りければ、ピラト終に意を屈して水盤に手を洗て曰く、我はこの義しき人の血に罪なし、汝等自らこれに當れと。かくてイエスは祭司等の手に付されたり。

方伯の兵士等こゝに彼を公廳の前に曳き、全營をあつめて笞てり。絳衣を被らせ、棘の冕を戴かせ、其右手に葦を持たしめて、其前に跪き嘲けりていふやう、アヱ、猶太人の王よと。又其面に唾し葦を奪ひて、首を擊ちたるなど、種々の辱を加へたる後、原の衣をきせ、十字架に釘けむとして、刑場に曳きゆきぬ。刑律に從へば罪人自ら架を荷ふ定なれど、イエス既に疲れて堪うべくもあらず、乃

ち路上に遇へるクレシ子のシモンといふに負せつゝ急きたり。道すがら、群集あまた從ひ來りしが、彼の爲に哭き哀むはたゞ女人のみ。イエス顧みていひけるは、エルサレムの女子よ。わが爲に哭くなかれ、唯おのれとわが子の爲めに哭け。產まざる者、未た孕まざるの胎いまだ哺ませざる乳は福なりといふ日至らむ。其時人々山に對て、われらの上に壓れよ陵に對てわれらを掩へといはむ。もし青木にさへかくあらば、枯木は如何にせられむと。西北の都門を出て、幾何ならず、地瘠せ草枯れたる荒野に達しぬ。名さへ忌ましくゴルゴタと呼びて、髑髏といふ意なり。兵士等先づイエスの衣を褫ぎ、掌に釘ち、足を縛して、地上に樹てたる後、掲げたる板の面を見れば、希伯來、希臘、羅甸の語にて、猶太人の王、ナザレのイエスこれなりと書るされたり。これピラトが猶太人の殘忍

を憎みて、惡謔を試みたるもの、逾越節に集れる國人の眼には如何ばかりの暗嘲なりけむ。都城に往來する者、横に之を見て汚辱の感堪へ難けれど、既に如何ともする能はず、乃ち怒をイエスに徙して罵るやう、汝人を救ひて、自ら救ふ能はざるか。汝が賴める神は何事をも爲し能はざるかと。猶太人の例として釘罪の者に、魔睡藥混ぜたる盃を與ふることあれど、高大の勇を以て之を辭し給へるイエスは、痛楚益々甚しく、加ふるに堪うべからざる渴漸く迫りて、心神殆ど絶入らむとす。二人の偸盜、この時、イエスの左右に釘けられて、同じく苦悶にもだへしが、其一人は苦痛絶望のあまり、冷刻の衆人と聲を合せて、汝もし基督ならば、自らを救へと罵りけるに、傍らなる、ほかの一人は、無辜なるこの君、萬民の爲に身を捐てゝ、仁を爲し給ふに、深く驚きつゝいひけるやう、汝

同じく罪を受けながら、神を畏れざる乎。われらが刑を受くるは當然なり。されどこの人は何の罪なかりきと、轉じてイエスに對ひ、君よ。みくにゝ至らむ時、われを憶ひ給へと願ひぬ。イエスたゞ茲に人情のすべて惡ならぬを覺え、慰めて曰く、汝我と偕にけふ樂園にあらむと。架下數尺の所、羅馬の兵士等は、刑戮の酸になれて何の悲むことなく、籤もてイエスが衣を頒け爭ひ、祭司の徒亦荐りに嘲弄の辭重ぬる間、少し隔りたる丘の上には、母マリヤを首として、先に湖畔に教を享け、今巡禮の群に入りて京に上ほれる女人あまた集りて哀に暮れゐたりしが、漸くすゝみ寄りて愛徒約翰はマリヤを介けて十字架のもとに來りぬ。イエス乃ち上より母にいひけるは、婦よ、これ汝の子なりと頭にて約翰を示し、また彼に母を托してこれ汝の母なりといひければ、彼くづをれた

るマリヤを率ゐて、己が家に携れゆきぬ。

時已に午に近くして、暗黑あまねく地を蓋ひたれば、羅馬兵卒の戲謔も、にはかに靜まり、祭司の徒らも此異徵に驚きて、懼るゝ事甚し。これより三時に至るまで、十字架上の苦悶何ばかりなりけむ。福音者既に傳ふるなく今に知るべきよしなけれど、イエスは凡ての事已に竟れるを知りて、肉體の苦更に激しく、大聲に叫びて曰く、エロイ、エロイ、ラマサバクタニと。これ昔ダビデが曙の鹿の調にあはせて、伶長に歌はしめたる詩篇第二十二章の破題にして、吾神吾神曷ぞ我を棄て給ひしやといふ意なり。身もと神位にありて、而も人胎を享けたるなれば、黃泉こゝもとに迫來て、底ひなき苦を覺ゆることゝ人間の量り知る限にあらず。傍なる一人此語葉を聞誤りて、かれエリヤを呼ぶなりといへり。須臾にして

語あり、吾渇くと。兵卒のひとりポスカといふ醋に、海綿を潰し、牛膝草に附て其口に予へしに、事竟りぬと一聲ありて、靈を付し給へり。この時聖殿の幕、上より下まで二に裂け、地震ひ、磐破れ、墓啓けて眠れる聖徒の亡軀おほく甦れり。これらの變異は、先の嘲罵を飜して、畏怖と爲し、冷平の兵士をさへ、いたく動かしたるか、百夫の長傍にありて、架上を仰ぎ歎じて曰く、誠にこの人は神の子なりと。衆みな胸を搏て散じぬ。

是日節筵の備日にして、既に日沒に近く、屍を十字架に置きて安息日を汚さむを恐れ、猶太人はピラトに對ひ、イエス等の脛を折りて取除かむことを乞へり。兵士等こゝに刑せられし二人の偸盗を下して、其脛を折りたれど、イエスの既に全く息絶たるを見てかくせざりき。されど一卒なほ其死を疑ひ、戈もて其脅を刺しけるに、血と水と直に流れ出たり。この時議員の一人にて、アリマテヤのヨセフといふもの、先にイエスの教に服して、密に同情をよせしも、終に衆庶の凶行を止むる能はざりしを悔ゐ、ピラトに來て、イエスの屍を乞ひゆきぬ。猶太の俗もと安息日を、日沒より數へたれば、この夕たゞ假葬の事なさむとて、潔き布にて軀を裹み、沒藥蘆會をつめて、わが家の新冢に納め、墓の口に大なる石を轉ばして去りぬ。翌日祭司の徒、先に諸の變異を覩て、心安からず、將また復活の豫言を憶ひ出で、使徒等屍を竊みさりて民を惑はさむ事を恐れ、番兵數輩を備へて塋を守らしめ、又石に封印したりき。

安息日の夕、かくて過き、曙の空わかるゝ日曜のまだきに、敬愛の心篤かりけるマグダラのマリアは、香の油ぬらむとて苑内の塋

に近よりし時、墓石いつか轉されて守れる者既に去れるを見、怪みて墓畔に至れば、皓く輝ける衣の少年ありて、右の方に座せるに愕き怖れぬ。彼言けるは驚く勿れ、イエスは甦りて、はやこゝに在らず。去て使徒等に告げよ、ガリラヤに於て再び主を見るべしと。マリヤこゝに驚喜の余り走て使徒に告くれど、皆虚誕として信せず。たゞ約翰と彼得とのみ驅け出して、墓門に至りしに、眞や塋のうち、屍なく、たゞ白布の疊み置かれたるを見たり。

マリヤこの時未だ、固くは復活を、信せず。墓畔に俯して、むせび哭きつゝ、人わが主を取り去りぬ。われ其何處に置かれたるを知らずといひて、花園を横ぎりゆくに、婦よ何を哭くや。誰を尋ぬるかと問ふ者あり。マリヤこれを園守ならむと思ひ、君よ、もし彼を移しゝならば、其處を敎へ給へと怨じねがひたるに、湖畔花溫きこ

ろはじめて、耳に染みたる生前の妙音にて、マリヤと一聲よび給ふ。頭を擧げて、ふと仰ぎばありし世の俤につとそひて、あらはれ給ふなつかしさは、よのつねの語葉もていふ能はず、たゞ夢見心地にてラボニと拜しぬ。これなつかしき師の君といふ心なり。イエスいひたはく、我に捫はる勿れ。われ未だ我父に升らざれば也と。かくて甦生のイエスを始めて見たるは、情濃に信篤き女人の眼なりけり。

イエス其後四拾日の間猶太の諸方に現はれて、使徒の疑を解き、信を堅め、復活の事實を以て基督敎の根據とし給へり。今福音書傳ふ所に據れば、(一)上に擧げたるマグダラのマリヤに現はれしのち(約翰廿)(二)他の女人に(馬太廿八)(三)彼得に(路加廿四、哥林多前書十五)(四)エマオ路上二人の弟子に、(路加廿四)(五)十人の使徒に(同

上)現はれ給ひき。これら皆第一復活週中に起りぬ。

(六)はじめ使徒デトモと稱ふるトマスは、復活の事實を信ずる能はず。十人の使徒が、主に見えたる折からも、障ありて偕に在らざりしを以て、彼等に云ひけるは、われもし其手に釘の迹を見、わが指これに探り、わが手を其脅に觸るゝに非らずむば、信ぜじといひぬ。八日の後衆皆會してトマスも偕に座し、戸を閉ぢて日曜の禮拜を行ひけるに、イエス忽ち其中に立て、汝等安かれと問安し給ふ。遂にトマスに對ひて曰けるは。汝の思へる如く、われに探りて信ぜよと。トマス慚愧措く能はず、たゞわが主よ、わが神よと答ふるのみ。イエス彼に曰けるは、汝われを見しに因て信ず。見ずして信ずる者は福なる哉と(約翰廿一)

其後(七)ガリラヤの湖畔にて七人の使徒に、(約翰廿一)(八)ガリラヤの一丘に於て五百人の弟子に、(馬太廿八)(九)雅各に(哥林多前書十五)現はれ給ふこと合せて九回此間人の眼に寫り、人の手に觸れたれど、今や人體を棄てかの終の審判の日に至るまで現はれ給はざらむとす。乃ちエルサレムに使徒等と遇ひ、之をベタニヤの方に導き、山間の寂靜なる處に訣別を告げ、手を擧て彼等を祝し給ふ時、彼等を離れ天に擧げられ給ひけりといふ。

* * * * * * * * *

かくの如きは西歐の碩學が、福音書に種々の精緻なる高等批判を加へ、異教徒の文獻に細密なる參照を求め、猶太人の典籍に深邃の研鑽を加へたるの結果なり。著者はイエスの傳を叙するものにして、其敎の信を勸むるにあらず。たゞ此異常なる現象と時を同うしたる猶太敎法師ガマリエルの言を假りて、この傳を終

らむかな。

曰く以色列の人々よ。汝等この人たちに就て爲さむとする事を愼むべし。曩にナウダ起て、自ら誇れり。これに從ふ者おほそ四百人ありしが、彼殺されて跡なきに至れり。其後戸籍調査ありし頃、ガリラヤのユダ起て、民を誘ひ從へしが、彼も亡びて從ふ者悉く散りぬ。今われ汝等に語らむ、此人々を容して係はる勿れ。其謀る所、行ふ所、人より出つるならば必ず亡びむ。もし神より出なば、汝等かれらを亡すを能はじ。恐くは汝等神に逆らふ者とならむ。

世界歴史譚第參編　耶蘇終

明治三十二年三月廿五日印刷
明治三十二年三月廿[illegible]日發行

定價金拾參錢（耶蘇）

著者　上田敏

發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　金崎金平　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

印刷所　合資會社博進社工場　東京市小石川區久堅町百〇八番地

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大和田建樹君著

日本大文學史

卷之壹……四月一日發行

全五冊

洋裝菊判美本紙數壹冊三百頁餘

正價壹冊金四拾錢
五冊前金壹圓八拾錢
郵稅壹冊八錢

文學史は文學發達の歷史なり、故に苟も斯道に志す人の明にせざるべからざるものとす。大和田先生が斯道の指導者として、特に得意の此著を成せしは、偶然にあらざるなり。四方の君子この書編述の体裁如何を知らんと欲せば、請ふ左の目次を見給ふべし。

卷之壹目次

第壹編……總論
●第壹章……我國の言語と文章●第參章……普通文と美文●第四章……散文と韻文●第五章……謂はゆる和文學●第六章……文學史を學ぶの必要●第九章……文學と外界の現象●第七章……外國文學との關係●第八章……文學史と普通歷史との異同

◎第貳編……上古の文學
●第壹期……紀元前後●第壹章……概說●第參章……文字の有無●第四章……和歌の起原●第五章……散文の起原●第六章……佛法の傳來●第七章……作例●第八章……支那文學の傳來●第九章……概說●第拾章……常期の歌文●第拾壹章……作例●第拾參章……漢學の隆盛●第拾四章……漢字の利用●第拾五章……和歌の隆盛●第拾六章……散文の成立●第拾七章……修史の成功●第拾八章……印刷術の起原●第拾九章……韻文の作例●第廿一章……散文の作例●第廿章……著名の作者●第廿一章……概說●第拾參章……藤原奈良の朝●第拾貳章……例◎第參期

●卷之貳……中古の文學
●卷之四……近世及び今代文學
●卷之參……近古の文學
●卷之五……文學年表、索引
●卷之五……文學史語釋

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

吉田晩稼先生書

楷書千字文

全壹冊木版日本紙刷和裝　正價金參拾八錢　郵稅四錢

吉田晩稼先生は現代臨池の名家なり、久しく墨場に敏腕を揮はる、爾來**先生**の書體は滿天下の賞賛を博し世人の其墨帖を欲すること雲霓の如くならず、而して諸體中殊に**楷書**を以て**先生の特色とす**是れ本館が先生に請ふて本帖を出版する所以なり、故に一字一點悉く活動し、**先生獨特の筆法**が自在に了會し得べし賞に習字帖中得がたき稀品なれば、何人も閑窓淨几に一本を備へざる可からず。

王羲之書	天朗帖	正價四拾錢 郵稅八錢	法度嚴嚴に結體正しく雅力遒勁
趙孟頫書	蘭亭記	正價四拾錢 郵稅六錢	
文徵明書	赤壁賦	正價四拾錢 郵稅六錢	
董其昌書	赤壁賦	正價四拾錢 郵稅八錢	風にして神高く而して能く臨池の模範となす
蘇東坡書	落花詩	正價四拾錢 郵稅八錢	
聖書草書	聖母帖	正價四拾錢 郵稅六錢	
孫過庭書	千字文	正價四拾錢 郵稅八錢	過ぎ去りし今日の比なき發行の法帖なり
文徵明書	千字文	正價四拾錢 郵稅八錢	
歐陽詢書	千字文	正價四拾錢 郵稅八錢	
米芾書	千字文	正價四拾錢 郵稅八錢	意匠凝高にして最も美なり
河行書	千字文	正價四拾錢 郵稅八錢	
米芾書	千字文	正價四拾錢 郵稅八錢	尚美麗なる新式書にて以て世に
河橋市書	千字文	正價四拾錢 郵稅八錢	
佐瀨得所書	千字文	正價六拾錢 郵稅拾錢	
菱潭湖書	千字文	正價七拾錢 郵稅拾錢	

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

巖谷一六先生書
◎一六蘭亭帖　正價貳拾錢　郵稅貳錢
日下部鳴鶴先生書
◎鳴鶴蘭亭帖　正價貳拾錢　郵稅貳錢
東京日本橋區本町三丁目
發兌元　博文館

續日本歌學全書

全部拾貳册　紙數壹册五百頁以上　毎月壹回發行

第九編　近世長歌今様集

東宮侍講　本居豐穎翁序　佐々木信綱君編

寫眞（●賀茂眞淵翁長歌眞蹟　●本居太平翁長歌眞蹟　●足代弘訓翁長歌眞蹟　●鹿持雅澄翁長歌眞蹟）

銅版（●足代弘訓翁長歌眞蹟）

全壹册洋裝美本　紙數五百貳拾餘頁　正價金參拾五錢　郵税六錢

本書に收めし近葉菅根葉は、長流契沖眞淵門下の作の長歌を、濟水淵臣のあつめしもの、藤垣内集は、太平翁の長歌集にて、未だ刊行せられざりし書ぬでのや集は、京都わでのやに人々あつまりて詠み出せし民歌を、太平翁の撰ばれしもの、寛居長歌集は、足代翁の作山齋長歌集は、鹿持翁の家集にゆらむろ集は、神奈川の個櫻園長歌集は、中沖なる渡邊は、故佐々木翁の撰て、世に公に成らざりし珍書なり。また辨玉の家集なり。以上數篇は、新體詩を學ひ、長篇の歌を詠せんとする人の必ず座右に備ふべき良書なり。

▲第壹編　賀茂眞淵翁全集上
▲第貳編　賀茂眞淵翁全集下
▲第參編　本居宣長翁全集
▲第四編　香川景樹翁全集上
▲第五編　香川景樹翁全集下
▲第六編　小澤蘆庵翁全集
▲第七編　近世名家家集上
▲第八編　近世名家家集下
▲第九編　近世長歌今様集
▲第拾編　桂園門下家集
▲第拾壹編　明治名家歌集上
▲第拾貳編　明治名家歌集下

定價　壹册五錢金三拾六錢　壹册前金壹圓九拾錢　全部前金貳拾三圓七拾錢　郵税壹册八錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

華族女學校學監下田歌子君著

家庭文庫

第八編　女子手藝要訣

全壹册和裝　大判大和綴正價金五錢郵税八錢

蠶桑、裁縫、刺繍、押繪、編物等、凡て我邦の女子に缺くべからざる手藝は、一々之れを圖解して詳密なる説明を施し、之を讀めば師に就かずして、各種の工藝自ら悟了するを得べし。眞に深切丁寧の良書、請ふ一本を購ふて坐右に備へ玉へ。

家庭文庫總目次

◎第壹編　女子書簡文
◎第貳編　女子普通禮式
◎第參編　詠歌の栞
◎第四編　料理手引草
◎第五編　婦女家庭訓
◎第六編　母親の心得
◎第七編　家事要訣
◎第八編　女子手藝要訣
◎第九編　女子普通文典
◎第拾編　作文の栞
◎第拾壹編　女子遊戯の栞
◎第拾貳編　女子習字帖

全部拾貳册　藍刷和裝大和綴正價（前金）●壹册裝金五錢●六册壹圓九拾錢（毎月發行）●拾貳册壹圓六拾錢●郵税壹册六錢（壹回）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

84
22

第壹編

釋迦

文學士高山林次郎先生著（再版）

大聖釋迦の傳記や、實に一個の詩篇、個人の生涯として趣味饒なるは、古今聖賢中稀に見る所也。佛教三千年の流傳を一代の人格に收めたる、彼れは是れ什麼の人ぞ、之者は佛教者に非ざるも、彼れの傳記に就いては最も大いなる興味を感ずる一人なり。釋迦の高潔なる感情と、偉大なる精神とは、夫れ著者の詩趣ある文藻によりて顯現せらるゝに庶幾からむ乎。

下村觀山君密畫入

毎月壹回發行

毎編著名文學大家執筆

世界歴史譚

毎編著名和洋畫伯挿畫

全部廿四冊

世界歴史譚は、世界歴史の各時代と各國民を代表するに足るべき偉人豪傑の傳記なり、著者は何れも知名能文の學士なれば、文章の簡明、事實の確的にして評論の妥當なるは言ふ迄も無し。

洋裝菊判美本紙數百三十頁以上壹冊拾參錢○六冊七拾錢○拾貳冊壹圓卅錢○廿四冊貳圓五拾錢○郵税各四錢……

正價（前金）

第參編

耶蘇

文學士上田敏先生著

年尚壯に滿たず、早く已に道義の犧牲と爲り、道を傳ふる僅に數年なるも、よく四海萬世の師表たりし大天才基督は、こゝに上田文學士の精刻なる筆に依て描出せらる。基督の愛の生涯、讀み來りて花香春風に薫ずるの想ひあらん。

中村不折君密畫入

文學士笹川潔先生著　小坂象堂君畫

▲第四編 **比斯麥**……四月刊行

文學士大町芳衛先生著

▲第五編 **漢尼拔**……五月刊行

文學士笹川臨風先生著

▲第六編 **岳飛**……六月刊行

發兌元　博文館

第貳編

孔子

文學士吉國藤吉先生著

堯舜禹湯文武周公の意を祖述し、以て之れを大成し、別に一家の見地を開き、啻に支那一國に止まらず、實に世界に哲人として、吾人萬世の師表なる孔子は、吉國文學士の精刻なる觀察に依て紹介さる。這個大偉人の面目、神采紙表に炳爛し來る。

横山大觀君密畫入

巖谷漣山人編　洋裝菊版表紙石版畫

世界お伽噺

毎月一回　毎編著名畫伯密畫挿入

全部廿四冊

正價一冊金一錢●七冊前金四拾錢●六冊前金八拾錢●廿四冊前金七拾錢　郵税一冊一錢ツヽ

世界お伽噺は、其題號の示す如く世界お伽噺を渉獵し、遠くは世界萬國のお伽噺を渉獵し、遠くは神話、經典の深き、近くは口碑、傳話の廣き、遍ねく研究參酌して、編者の藥籠中に收む。是れ只だ少年少女が爲めたる耳ならず、大人父兄の爲めにも、恐らくは未聞の快話多からん、眞個本邦未發の奇書、日本空前の珍籍とす。

▲第三編迄既に刊行せり

▲第拾三編以下の目次は追て廣告す。

第壹編　世界の始（太古）

附　人間のはじめ

●讀賣新聞評　著者は漣山人にて第一編として『世界の始』を載す在來のお伽噺者の噺の比にあらず『されは私も今度は一層奮發を以て已に一年程前から材料收拾に掛つたるもの以て全世界の重なる地方から其特色の話柄を集め例の二十四編を以て完成さるる考案』なりゝは著者の自序なるが初編まづ祭高を以て其端緒を開く。

《中村不折畫》

……（再版出來）

第二編　五色の石（支那）

附　指南車

●萬朝報評　例の漣山人が少年讀者の爲めとて著はせしものにして世界のお伽噺の第二編なり、材を支那古代に取りて之に十二朝平談の趣を加へ、梶田半古の密畫を所々に挿みて興を助けたるなど用意中々周到にして、少年の爲めに最も善良なる讀みものなるべし。

《梶田半古畫》

第三編　珊瑚島（南洋）

附　丸木船

開闢の勇士マアピンが、南洋の天地を開き、火神を退治し、遂に珊瑚島を釣り揚げた、慈天動地の功名話より、ラワと云へる酋長が、白鷺の助力によりて、丸木舟を作り、進んで月光島を乘取るの冒險談なり。

《水野年方畫》

(4) 印度 **檀特山** 附帝釋天敬中畫

(5) 獨逸 **魔法博士** 附三面鏡永洗畫

(6) 獨逸 **法螺先生** 附智惠娘桂舟畫

(7) 英國 **無人島大王** 魯敏遜譯審也畫

(8) 露國 **鬼婆** 附魔卒畫未定

(9) 露國 **七人冠者** 附二人婿畫未定

(10) 英國 **大人島小人島** ガリハリスト島巡リ畫未定

(11) 佛國 **驢馬姫** 附病獅王畫未定

(12) 瑞典 **不思議の燈** 附奇怪井畫未定

毎月一回發行

毎編著名文學大家執筆

少年讀本

毎編著名和洋畫伯挿畫

全部五拾册

洋裝菊判紙數百三拾頁以上美本

正價（金前）

●一册拾三錢 ●六册七拾錢
●十二册一圓卅錢 ●廿册二圓五拾錢
●郵税 一册四錢ッヽ

七編以下近刊

1 **高島秋帆** 水野年方畫

《福地櫻痴著》

興味なる薄幕府時代にありて、學殖淵博兼て盛行の文に渉り、夙く已に泰西文明の新光輝を我邦に傳へ、特に砲術を弘通するに當て、最も効績ありし維新前の豪傑高島秋帆は、茲に櫻痴氏の逸宕快利の文章により紹介せらる。（再版）

2 **白河樂翁公** 富岡永洲畫

《中邨秋香著》

勤儉尚武を以て、當時奢靡の流弊を救はんとし、實踐躬行敢て倒瀾一逆ふ。這個罕に貴紳に視る所の偉人樂翁公は、其幼時非凡の行跡より、天下の權を握りての治績、而して退隠文事に熱心なりし生涯の事歴、秋香先生の筆鋒に描かれ來りて、神采生動す。正に少年諸君の好讀本。

3 **河井繼之助** 梶田半古畫

《戸川殘花著》

北越の俊傑河井繼之助、春草秋葉に埋没せられたる一個の英雄なりき、渠は今殘花先生の筆に依りて、他の豪傑英雄と同く少年讀本に登場す。其技倆の如何なりしかは、卷を披きて後に知れ、嗚呼忠烈、日本男兒。

4 **三條實美公** 寺崎廣業畫

《依田白川著》

搢紳の中に在りて、古來罕に觀る所の英豪、維新の大功臣、條實美公は、こゝに依田學海先生の史眼に依て、其眞相を發揮せられ、先生が獨特の羅腕は、這般偉大の忠臣を描き出して殆んと餘蘊なし。眞に少年諸君の好讀本。

5 **曲亭馬琴** 下村觀山畫

《饗庭篁村著》

我邦に小説なるもの、體形未だ成立たざるの時に當り、宏博の學識、縱横の能文、こゝに傳奇の一體を開きて、生涯の著作、惠子の五車も啻ならず。篁村翁今此馬琴を傳す、傳者誠に其人を得て、明確の識、流麗の文、馬琴の面目卷中に躍動す。

7 **山田長政** 菱田春草畫

《遲塚麗水著》

大阪陣の戰雲收りて、熱血男子其機鋒を露はすの餘地なきに激し、單身奮つて暹羅に入り、竟に同國の政權を握るの顚末麗水氏獨得精練の筆を揮つて描出す、英雄の面目紙上に躍動す。加ふるに春草氏の畫筆上花を添ふの觀あり。（近刊）

84
22
Ⓜ

021335−000−2

84−22

耶蘇

上田　敏／著

M32

ABI−1221